

モルモットとふしぎな
目覚まし時計

?▽?

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多分40番煎じくらいのタイムリープ系

タキオンのケガを防ぎ、URAファイナルズへと進む為にトレーナーが奮闘する物語

目次

世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 1	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 0	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 9	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 8	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 7	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 6	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 5	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 4	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 3	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 2	世界線 3 0 3 1 5 f 3 0 3 1	世界線 3 0 3 0
74	69	64	57	53	49	43	36	26	18	9	1

世界線 3 0 3 1 5 f 3 2 3 2	世界線 3 0 3 1 5 f 3 2 3 1	世界線 3 0 3 1 5 f 3 2 3 0	◆◇世界線 3 0 3 0 5 f c e b l ◆	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 9	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 8	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 7	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 6	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 5	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 4	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 3	世界線 3 0 3 1 5 f 3 1 3 2
163	156	150	122	119	111	106	99	93	87	83	79

世界線	世界線	世界線	世界線	世界線
3	3	3	3	3
0	0	0	0	0
3	3	3	3	3
1	1	1	1	1
5	5	5	5	5
f	f	f	f	f
3	3	3	3	3
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
6	5	4	3	2
195	184	179	173	169

世界線3030

——あれは、寒い冬のことだった。

俺の担当したウマ娘……アグネスタキオン。彼女の”最後の”レースであった有馬記念の後だ。

長距離を走り切れるトレーニングを積み、激しい上り坂が有名な中山のコースで勝てる為に入念な準備を続けた。

そのかいあって彼女は見事優勝することが出来た。そして俺とタキオンは喜び合う——答だった。

それは、唐突に告げられた。

「トレーナー君、URAFアイナルズには出ないことにしてくれ。」

どうしてだ。何故、どんな理由で——そんなことを聞く前に一つの言葉が告げられた。

「私の脚はもう限界なんだよ。本当のことを言えば、レースには出たい——だけど、私の脚はもう……これ以上の負荷を掛けるわけにはいかない。」

いつもより目にハイライトが入った状態で彼女はそう答えた。

タキオンを襲ったのはケガだった——レース中に発生したケガ……彼女はじつとこらえて走った。走り切った。

医師から引退を促される前に、ウマ娘の身体をよく知っているタキオンは自身が走れないことを理解していたのだ。俺は……何もわかっていなかった。

URAFファイナルズに出走が決定したと伝えに来てくださった理事長にタキオンのケガを理由に出走取消の旨を伝えた。理事長はとても残念そうだったが、仕方がないと。それどころか、タキオンがウマ娘の研究ができるような研究施設に入れるように便宜を図ってくださいました。

『下問っ！君はまだトレーナーとしてやっていけるか？』

『まだ、やれます。……ですが……少しだけ……期間を空けさせてください。』

『無論！心の整理が付いてからで良い！』

『すみません……』

タキオンの有馬記念優勝&引退&お別れパーティが終わった後、俺は理事長の所へと向かった。このトレセン学園にはトレーナーが付いていないウマ娘はまだまだいる。無論、そんな彼女らも磨ければ色んなレースで勝つウマ娘だ。理事長としてはそんな彼女らを育ててあげたいという思いはあるだろうし、俺も新人ながらも多くのウマ娘を担

当したいと思っている。

……だが、ここまでとは思わなかった。トウインクルシリーズの場で競い合うということがどれだけ厳しいということが……常にケガというリスクを背負いながらも夢を追いつける彼女らを導かねばならないという重責を軽く見損じていた。

タキオンは旅立った。彼女の少ない友人でありライバルであったマンハッタンカフェ、タキオンが他人のようにとは思えないなんて言つて、よく面倒を見ていたダイワスカーレット、そしてどうして来たのかわからない程接点が少ないはずのエアシャカールの3人が見送った。

帰路の足取りは重い。行きはタキオンが話題を振つてくれたり、エアシャカールをイジっていた為に賑やかだったのだが……俺を含めてタキオンがいなければほぼ他人同士の関係だから話す事もなかった。

ウマ娘の寮の前に車を停めて、彼女ら3人を見送った。

それが終われば、俺は寮へと帰る。

(……タキオン……)

来月にはURAFファイナルズの決勝戦が始まる。中距離ではマンハッタンカフェ、ダイワスカーレットが決勝戦へと進出していた。忙しい筈なのに見送りに来てもらつて

ありがたいと思う。あとで彼女らのトレーナーにも礼を言わなければいけない。

鞆を椅子に投げ捨て、手洗いうがいをしてどっぴかりと座り込んだ。

「……俺は紅茶派のままだ……」

紅茶を飲んでさっさと寝よう。明日は別に何もないんだから。タキオンを起こしに行くのも、弁当を作るのも、何もする必要はないんだ。

ピンポン

「今行きまーす」

呼び鈴が鳴った。……同僚だろうか。そう考えてドアを開けて覗き込むが誰もいない。

(……?)

いたずらかと思ってドアを全開にすると何か引つかかかってザリザリと擦れる音がした。音源を見ると、小さなボール紙の箱が置いてあった。

「……誰がこんなものを……?」

住所や伝票などの類はないので直接置かれたのだろう。その時、ちょうどトレーナー寮の前には3人のウマ娘が走り去っていく姿を捉えた。後ろ姿で判別は付きづらいが俺の知っているウマ娘ではないようだった。

(あの三人が、か? まあいい。チャイムを鳴らしたことは俺宛てだったんだろう。)

タキオンのファンだろうか。それなら生憎もう行ってしまったのだが——なんて思いながらも部屋に戻って包装をといた。

「目覚まし時計……？」

中に入っていたのは赤い塗装が特徴的なアナログ式の目覚まし時計だった。何故かわからないが、西暦や曜日まで表示されるものだ。しかも反転フラップ式で表示されるのでお値段は結構高そうだ。

（タキオンが朝弱いからってか？……いらねーよ）

同封されている無駄に分厚い説明書らしきものをゴミ箱へ投げ捨て、時刻を合わそうと裏を向けるとなんとつまみが7個ほどあった。この意味不明なつまみの多さに俺はゴミ箱を漁って説明書を開く。

（あん……？）

奇妙な内容だった。説明すると長くなるので要約すれば……

——この目覚まし時計は時を超えられるらしい。

ただし、過去限定で飛びたい時間に時刻を合わせて就寝する必要がある。何故かはわからないが、この目覚まし時計の存在を誰かに漏らせば二度と過去へは戻れないらしい。そして、時計の一番上に表示されている“5”という数字が時を戻せる回数のように。

「俺をバカにしてんのかッ!?」

ピンポーン

「すみませーん!」

「——ッ!」

(今度は誰だッッッ!?)

こんなふざけた事をしたウマ娘であればただじゃおかない。そう思つて扉を強く開けた。

「——桐生院トレーナー……」

「あの……もしかしてお忙しかつたり……」

「……いえ、大丈夫です」

——桐生院葵。ハッピーミークというウマ娘のトレーナーであり、俺と同期のトレーナーだ。タキオンとは中距離のレースで争つた仲だ。その担当のハッピーミークは確かURRA決勝戦に出るのだからか。

「その、URRA決勝戦進出おめでとうございます。」

「あつ!いえ、ミークが頑張つた結果というか——」

口火を切つたのは俺だった。どうやら、受け答えから察するに相当気を使わせているみたいだ。必死に俺が傷付かない言葉を探して話しているが……嬉しくもあり悲しく

もある。

「あまり謙遜はしなくて良いですよ。……ケガなんて、誰にも予想できるものじゃないですから」

「――！」

桐生院トレーナーは、僅かに目を見開いて俺のことをじつと見た。彼女が何を考えているのかなんて今はどうでもよかった。

それからは会話がうまく続かず、そのままズルズルと中身の無い話をするだけで彼女を見送った。

(……いろんな人に気を使わせてんだなあ……)

タキオンを担当するにあたってとてもお世話になったたずなさんや、トレーニング施設の強^{アップグレード}化をしてくれた理事長、今さつきここにいた桐生院トレーナーや先輩方達に気を使わせていたのだろう。

ベツトに伏せながら右にある棚に置いてあるあの”目覚まし時計”を見やった。

(時を戻せる……か。)

その時計を手で手繰り寄せて持ち上げる。ふざけたフォルムをした赤い時計はカチカチと時を刻んでいないことに気が付いた。もしかすればこれは本当に時を戻せるの

かもしれないな。なんて思って俺は3年前のあの日——タキオンと初めて会った日の朝に時刻を合わせた。

(どうせ次の日になつてただけだ……)

俺の意識は闇に溶けた。



ジリリリリリリ

いつもとは違う喧ましい^{けたた}ベルの音を聞いて飛び起きた。少し遠い位置にある時計を指してベットから這い出ると同時に果たして時を戻せたのか気になって自身の携帯端末の電源をつけた。

——”2019年 4月 3日”

(うそ……だろ……)

ここから、長い戦いが始まろうとしていた——

世界線30315f3031

(過去だ……間違はなく過去だ……)

トウカイテイオー、メジロマツクイーン、ウオツカやダイワスカーレット。彼女らが取った栄冠は無かったことにされ、ピカピカの新入生のままだった。先輩にたずなさん、秋川理事長、そして桐生院トレーナーも大した反応はなく、俺が新人だった頃とまったく同じ反応を返してきた。

過去だ。メールも、寮も、トレーニング施設も、トレーナー室兼タキオン仮眠室も……全てが元に戻っている。

だが――

(あの記憶はここに……)

そうだ。これから7時間ほど後の事だ。俺はサクラバクシンオーに追い掛けられているタキオンにぶつかると、が……

(よくよく思い返してみれば、タキオンが退学する寸前でトレーナー契約を交わしたんじゃないか……)

正直に言えば――待てない。件の有馬記念まで3年を切っているのだから、丈夫な

身体作りの食事とトレーニング、それにケガを予防する為のさらなる策を考えるにはまだまだ時間が足りない。もし、差し迫った状況であったが為にタキオンがトレーナー契約を了承したというのなら待つのが正解だが先程も言ったように悠長に待つてはいられない。一週間——いや、一日すら無駄にするには惜しい時間だ。

(……スカウトしに行くか。)

それらの懸念を差し引いても俺にはスカウトできると確信できる勝算があつた。一つ懸念を足すなら、彼女の行う”実験”くらいだろう。

幸いにも彼女の”実験”の程度はどれほどだったのか覚えている。局所的に蛍光色で発光するだけなら最早なんとも思えないくらいには慣れているのだ。

早速、彼女の元へ向かう事にした。未来を変えるその為に

~~~~~

タキオンの行動ルーチンは変わらない。変わるとするならば精々実験の内容か、邪魔が入らないように実験できる場所を定期的に移動するの2択程度だ。確かこの時期は……そう、この実験室だった筈だ。

片方はくもりガラスになっている引き戸の小窓から覗き込むと、そこには見慣れた制服を着てスタンドに固定した紫色の水が入ったフラスコを加熱する女生徒の姿が目映った。

こんなことをするウマ娘は彼女しかない——タキオンだ。

突如、俺を襲ったのは発汗と涙腺の刺激。タキオンに再び会えたことで緊張したのか冷や汗が背中や頭からどつと出ている。

(……あードキドキする。)

あの“目覚まし時計”が入っていた箱にあつた注意書きを思い出せ。まだ未来を変えた訳じゃない。……そうだ。”時”をタキオンに意識させないことが肝心だ。

落ち着けたのを確認して引き戸のくぼみに指を引つ掛けてガラガラと開ける。

(……くっ！しまった！どう言葉を発していいか分かんねえ！)

落ち着くことばかり考えていたのでいざ対面してみると頭が真っ白になる。結局落ち着けていない自分を責めながらも顎に手を当ててこちらを見ている彼女になんとか言葉を発しようとした。

しかし、先に口火を切つたのは彼女だった。

「……見覚えがない。大方君は新人トレーナーだろうが、どうしたのかな？」

「……アグネスタキオン。」

口腔がカラカラに渴き、水分を求めている。アルコールランプから発せられる二オイと彼女の僅かな苛立ちを感じ取りながら、二の次の言葉を紡いだ。

「トレーナーとウマ娘……二人が一緒にいるということはどういうことか。分かるだろ

……？」

「ふうん……君はスカウトしにきた。ということかな？」

「そうだ。」

やつと冷静になり始めた。……これじゃあ容易に掛かるな。なんて言えないと冗談を思いつける程には落ち着くことができた。

タキオンは黙りこくつたままだが、俺には揺るぎない勝算があるのだ。

——それ即ち、実利。タキオンはこと速度を上げることには掛けては夢を見るが、それ以外は非常に合理的で効率的な考え方を行う。よく言えば夢に向かって驀進……と言ったところだが、悪く言えば排除傾向にあるのだ。

タキオンの実利とはその『可能性』と『その果て』の探求に繋がるの1点のみ。それらを阻むモノは全て排除するべきものなのだ。逆説的に言えば、追求に繋がるモノなら熱く歓迎されるということ。つまるところ……

(時が戻る前とやることは変わらない。)

食事、お茶、実験。ほか諸々の全てを円滑に行える様にマネジメントすること。無論、こんなことを進んでやるトレーナーなんていないだろうからタキオンにとつては願ってもないことだろう。

「分からないねえ……君がどうして私をスカウトしようとするのかが理解できないの



さ。私の走りも見せた訳でもないのにねえ……」

（今なら見なくても分かるが……しかし不自然と言えば不自然か。）

「二つ噂を耳にしてね。タキオン、君の走りは『超光速』と謳われていた。」

「へえ、それは光栄だね」

『超光速』——それがどれほどのものなのか俺はデータ上でしか知らないが……先につばをつけておく位には惹かれた。」

「ふうん……」

（適当な建前はここまでだ……ここからが勝負所。ここでタキオンの興味を引かねばスカウトすることは難しいだろう。）

「……全くもって興味がなさそうだな。」

「そりゃあそうさ。まだスカウトをする理由しか聞いていないし、少なくとも私をキープしておく為にここに来たのなら本格的に契約を考えるのは後でも良いと思つてね。」

「ごもつともな回答だ。ただ……タキオンと俺には少し認識に齟齬がある。」

タキオンはオウム返しのように齟齬と聞き返して俺の言葉を待つ。

「ああ、さつき俺は惹かれた言つたが……それは少しだけ違う。分かりにくい言葉ですまないが、俺はタキオン以外をスカウトするつもりは毛頭ない。」

「……へえ、口ではなんとでも言えるが、それくらいじゃ私の考えは変わらないよ？」

「そうだな。ところで聞いた所によるとお前は何やらウマ娘の”可能性”について研究しているようだな。」

「——……何かと思えば取り引きかい?……まあ、そうだねえ……モノによつては考えなくもないが……」

(理解が速くて助かる……いい加減所々隠しつつ話すのもキツくなつてきた。)

「まずは、だタキオン。お前の要望を聞こうじゃないか。ああでも資金を援助するといふのはナシだが。」

「おや、流石にそれくらいは弁えているよ。……色々悩むが……君、健康そうだねえ。一つは君が私の作る薬の被験体となること。もう一つは研究を一番としてレースやトレーニングを行うことかな。」

「なるほどね……」

「どうしたのかな?これでも私と契約する最低条件だよ?」

今更この程度の障害なぞ全くもつて苦にならない。たかが発光するだけ。今では全く恐ろしくない。俺は差し出された条件を紙に書き取り、そこに付け加えていく。

「その程度なら問題ない。なんなら朝昼晩食事を作つてやつてもいい。実験用モルモツトのように実験したい時に付き合おう。」

「……私が条件を出した側なんだが……君、正気かい?」

まさにドン引きといったタキオンだが、未来では朝昼晩発光し続けたりするなんてザラだ。というか、タキオンが何度も実験するから光っていたのであって俺は決して自分から光りに行っている訳ではないのだ。殆どの人は勘違いしていたが……

「俺は正気だ。まあ、今すぐ決めてくれなんては言わない。あと、俺からも一つだけ条件を出そう。」

「ふうん……なんだい？」

「数日後の選抜レースに出てくれ。」

「ふむ……」

（タキオンなら受けると分かっている。このレースが何を目的とするのか、彼女はそれくらいすぐに理解してしまうだろう。）

「性根を言えば出たくない————だけど、これならレースに出た方が得だしねえ……はあ……どうやらとても恐ろしいトレーナーに捕まってしまったようだ。」

やれやれと手を振ってお手上げのポーズをするタキオン。俺は信じきれずにもう一度聞き返した。

「……つまり」

「受けるよ。契約。……まあ、今は約束のようなものだが。」

（目標達成ッ……！）

一先ずは第一の関門を乗り越えた。ここから第二第三の関門を乗り越えなければいけないが、今は好調なスタートに宴でも開きたい気分だった。が、それはそれとしてトレーニングメニューや栄養学に基づいた美味しい食事など……考えなければいけないのは無数にある。

↳ side タキオン↳

今しがた実験室に來た男が開けたドアを見据えながら、アグネスタキオンは思案に深けていた。

(彼は新人の筈だ、が。)

アグネスタキオンは新人君と会話していきつつか疑問を覚えていた。一つは——  
 「何故、あそこまで自分について知っていたのか」二つは——」  
 どうして自身の目指す実験の最終目的までも知っていたのか”そして、三つ目——”  
 勧誘をする為自身の身すらも差し出すという行為”これについてははつきり言えば異常だと思えない。

(自身について知っていたということについては噂か、生徒会……又は学園上層部の持つ情報か。彼が私をデビューさせる為に派遣されたのであれば知っていても何ら不思議はない。……だが——)

とてもスムーズに会話が出来た。少なくとも、目の前の実験を忘れるくらいには彼の勧誘にはワクワクさせられた。

性格や気が合うということを表すもので「ウマが合う」——という言葉がある。彼と話しているとまるで共に苦節を乗り越えた旧知の友のように思えた。もしかすれば、このトレセン学園に來た意味というのは彼に出会う為だったのかもしれない。

(……この表現は私らしくもない。そういうのはカフェが適任だろう。)

運命なんて非科学的なものを考えた自分を自虐をしつつも、タキオンの頭はしっかりと数日後のことを思い浮かべていた。

## 世界線30315f3032

選抜レース——ウマ娘の身体が完成し始め、走力が花開き始める彼女達がトレナー達にアピールする……いわば、俺達人間の就職活動の面接のようなものだ。

勿論だが、これにも有利不利はある。例えば名家メジロ家が出走するとなるとトレナーからはとても注目されるのだ。ウマ娘というのは家柄が重視される……つまりところ親が強いウマ娘だと子もまた強いという定説がある。

また、地方からの引き抜きで来たウマ娘も注目される。最近だと『芦毛の怪物』オグリキャップだが……とまあ、説明はそこそこにこの選抜レースはウマ娘、トレーナーどちらにとつても大切なものなのだ。

「えっ、アグネスタキオン!? 実力は高いけどかなり危険な子だつて噂の、あの……!?!」  
どこかからそんな声が聞こえてきた。ありや新人だな……（自分も周りからすれば新人だが）

確かタキオンの母と祖母はそれぞれ「桜花賞」と「オークス」を制している。中央の、それもG1を制するということはとんでもなくすごいことだ。どちらもクラシック級のウマ娘しか出走することができないので言ってしまうえば実質その世代で一人だけし

か得ることのできない称号を持つてゐることとなる。

……かの有名なトレセン学園生徒会長のシンボリドルフはそんなG1レースを現在では5つ……未来では7つも制している。そりやあ皇帝なんて言われる訳だよ……

「ん……タキオンはマンハッタンカフェに絡んでゐるな……」

何かしら話して……あ、どうやら断られたらしく「えー!？」って言つてるなあれ。

(大方タキオンが勝負に勝てば薬を飲めとか言つたんだろう。そりやあマンハッタンカフェも断るよな……)

俺が見ているのに気付いたのかタキオンはニヤリと笑みを浮かべこちらへ歩いてきた。

「やあやあやあ新人君。」

(このパターン、絶対に飲ませる奴だな……)

「なんだ? もう出走の準備を始めないといけないんじゃないか?」

「いやあ、まだ時間に余裕があるのでね。そんなことよりこれを飲んで欲しいんだ。ほら——」

やっぱりな、と思つてゐるとマンハッタンカフェがこちらに来てタキオンを引つ張つていく。

「そのトレーナーさん、タキオンさんの薬は飲まないほうが良いですよ。」

「失敬な！私はキチンと健康と安全を害さないように配合してるさー！」

ゼッケンを引つ張られているからか、引き裂かないようにジリジリと後ろへ下がるタキオンだったが、手にある試験管をポイツと俺に投げた。落とさないように両の手で受け取る。

「約束は約束だ！レースが終わった後で良いから飲みたまえ！」

喧騒の原因が去つていき、辺りの視線はもう一人の原因へと向かった。この手の注目はまだ慣れたもんで全く意に介さず試験管をポケットへと入れてレースを見守る体制になった。

「あの……」

「ん？」

先程の新人だ。(俺もまだ新人の域だがそれはいい)

どうやら俺に渡された試験管をどうするのか気になるらしい。当然のように飲むと答えたらずい顔をされた。……まあ、こんなのは目に見えた地雷だよなあ……確かに怖いとか心配とかはあるがタキオンの薬はそこまで重篤な副作用はない。主作用としては大体が筋肉量の増量だったりするのでむしろ良いものでもあるのだ。

ここで注釈しておくが、タキオンの薬をドーピングなんて言っではいけない。彼女曰く、短期的な増強作用のある薬はドーピングと呼び、永続的な効果が望める薬はドーピ



ングとは呼ばないのだ。もし、ドーピングなんて言ってしまったら……まあ、数週間は眩しくて眠れなくなる。といえば分かるかな。

こうこうしている内に出走の準備が整ったらしい。全員がゲートに収まっている。タキオンは8番か。

ゲートのランプが赤く光っている……そして、不意に14つのゲートが開いた——  
!

(出遅れ無し……何人かは中等部だというのによくやるものだ。)

このレースの距離は9ハロン——1800mと短い。殆どマイルレースと言っても良いくらいに短い。それはやはり中等部のウマ娘も走るが故だ。中盤には緩やかな坂があり、第3コーナーを曲がれば下り坂の短い直線を抜けてゴールとなる。

芝の状態も良好。走るにはうってつけの状況だ。

(タキオンはやはり先頭集団の後ろへ付いているな……)

2、3、6番の3人の逃げ……その後ろにピツタリとくつついている。恐らくだがタキオンはこの距離ならば体力は十分持つ筈だ。だから逃げのウマ娘の後ろへ付き、全体的なペースアップと疲弊を誘発させている。

(……ガチだ。)

本気

前にいるウマ娘を乱して、落として……指す。

俺も数度しか見たことが無いタキオンの本気の戦略。ああ、あの6番はもうスタミナが切れたのか。まだ第3コーナーまで行っていないというのに……

6番のウマ娘がタキオンに追い抜かれ、どんどんと順位を下げる。タキオンの顔はよく見えないが、きつと気分を良くしているだろう。何故なら前も後ろも支配しきつっている。

(最終コーナーを曲がり切って……——来た。)

タキオンが姿勢を低くし、スパートを掛けた。

その途端、周囲から感嘆の声が発せられる。タキオンの末脚を見て自然と漏れ出たという感じだった。

続いてタキオンの後ろに位置した集団がスパートを掛ける。だが、ハイペースにレースが進んでスタミナが切れたのか一部のウマ娘以外はイマイチ本気を出し切れていない。タキオンが完全に追い越してから、2番と3番は気力を振り絞ってスパートを掛けた。

——だが、遅かった。

逃げ、先行、差し。全て合わせて13のウマ娘は最初から作戦など無かったかのようにぐちゃぐちゃに団子になっている。

その前で、最早牽引役にでもなったかのように一人ぼつんと走り続けるタキオンがゴールしたその刹那、ターフが歓声で包まれた。

~~~~~

sideタキオン

(「これほど」力を見せれば彼も満足してくれるだろう。)

レースの結果は概ね予想通り……いや、予想以上の結果であった。とはいえ、自身を過信しすぎるのはよくない。あとで入念にストレッチやケアをしておこう。とタキオンは考える。

「アグネスタキオン！君はスカウトされる気は——！」

「ウチで走らないか——」

「三冠も夢じゃない——」

「いやウチで——」

「こっちで——」

「……………はあ。」

(……彼みたいな気概がない。本当にスカウトしたければ彼のような熱意を持って来てほしいねえ。)

聞き飽きた美辞麗句はいらない。それに自分には約束を結んだトレーナーがいるの

だ。今更自ら進んで実験体になるくらいに協力的なトレーナーを捨てて、研究すらさせてくれないトレーナーに付かなければならないのか。

「——トレーナーくん、どうだったかな私の走りは？」

「——な……ツツツ!!」

(アツハツハツハ！とても動揺してるねえ！)

トレーナー君がいなければこの熱烈すぎる勧誘の対応に頭を悩ませたと思うが、いや実際悩んでいて今回の選拔レースをすつぽかすつもりだったのだが……まあ悩まないことはなんて素晴らしいことなんだと思いつながら彼の回答を待つ。

「タキオンなりの本気を伺い知れた。だから……これを飲んで報いろう。」

渡した試験管——赤に染まる液体は自分で言うのもなんだが怪しさ満点だ。それを一瞬の躊躇いもなく飲み干した。私を含めて”彼以外”は目を見開いた。

「返すぞ。」

何でもない。ただ水を飲んだ程度の反応しか見せない彼のおかしさに堪えきれず爆笑した。ああおかし、何故かって一度動物モルモットに薬を投与するの実験を試した時に通常の水とすり替えて摂取させようとするも失敗し、結局むりやり投与しなければいけなかったほどの代物

だと知っているからだ。

モルモット以下なのか、モルモット以上なのかはさておき、こんな人間は中々いない。

いや、居てはおかしいのだ！自ら進んで実験に参加するなんてことは一つしか知らない！そうホイホイ命を差し出す姿勢を見せるのは胡散臭い宗教の狂信者くらいだろう。

彼の脹脛ふくらももの辺りがズボン越しからでもわかるくらいに淡い光を発していることから失敗を悟ったが、それはそれとしてその原因を探るべく思案に耽る。一先ず実験を続ける為に彼に実験室へと向かうようをに指示をした後、着替える為に更衣室へ向かう。

「……タキオンさん、あのトレーナーさんと契約を結んだんですか？」

「おやかフェ。そうだね、私は彼の担当ウマ娘さ。それがどうかしたのかい？」

「いえ……なんというか……色々”不思議”に思えたので。」

「不思議……？それは君のお友達絡みかな？」

「……そんなところです」

「私は君のお友達に結構興味を持っていてねえ。そうだ、これを機にお友達の実験をしたいんだが——」「そうですか。」「——行ってしまったか。」

実験になるとすぐこれだ。と手を上げて顔を横に振った。

(不思議……ねえ……確かに彼は自分から進んで実験体になろうとするくらいだし余程の物好きであることには違いないだろうが。)

なんて思いながらすでにカフェが開けた戸を遅れて開けるのだった。

世界線30315f3033

晴れてタキオンとのトレーナー契約を終えた俺はある程度の練習メニューと食事メニューを考えたものをタキオンへと見せた。概ねタキオンは了承していたが、速さを追求めず身体作り中心のメニューであることと、紅茶に砂糖を少量だけ入れることには反発の意を見せた。

練習メニューについては説明をすれば分かってくれたようだが、砂糖に関してはそれほどんでもないほど嫌がっていた。常人より頭を使っているから足りなくなつた糖分補給にはうってつけだとか言っていたが……正直俺はタキオンの激甘紅茶は飲みたくない。普通の紅茶も好きならなんであんなに甘くしたのか謎だ。自分ではまだまだ若いと思っているのだが、アレだけは自身の老いを感じるのだ。味覚のな……

一応制限をするようにと言ったもののタキオンは守らないであろうことは簡単に予想できるのでどうにかしてあのストライク・イーグルもどきの飲み物を制限させるのが俺の仕事だろう。前は食事を作り始めてから頻度が減つたが……

「……しかし、ウマ娘の体は不思議だな……アスリートをする人間じゃあこの量は食べすぎだ。」

両手に持つている弁当を見下ろしてそんな事を呟いた。

食べ盛りという時期もあるのだろうがやはり何度見ても慣れないものはある。俺は本当に触りだけ知っているくらいだがウマ娘用の栄養学もあり、ヒトとは消化酵素や栄養吸収率、更には味覚までも少し違うのだとか。それにしても、それにしてもだがあんなはちみーとかいう見たただけで吐き気がしそうなくらい甘そうなものをよく飲めるものだ。

(濃いや多いは分かるのだが……何故硬さを変えろという概念があるのか……そもそもドリンクと冠しているのに硬さとは何なのか？タキオンもおいしいと言って飲んでいたし……)

もし輪廻転生をしてウマ娘に生まれ変わったのなら飲んでみたいところである。色々なウマ娘たちを見るに恐らく普通に好物になるだろうが。

「ん……女神像……？」

まるで古代ローマの彫刻(肌はローブを着てほとんど隠されているがわずかに見える身体にはしっかりと美しい筋肉が彫られている)かのような三つの女神像の前にある疑問が浮かんだ。

(……ひよつとして、だが……あのウマ娘達は……)

あの時ドアを叩き、目覚まし時計を置いた三人のウマ娘。彼女らが何者か分からない

かったが髪の毛の長さなどはこの女神像と似通った部分があるが……

「……………いや、まさか、な。」

ウマ娘の在籍数はトレーナーの数の何十倍なのだ。勿論知らないウマ娘もいるだろうし、そんなふざけた推論を信じるよりかはまだ見ていないウマ娘がいると考えた方がよほどマシだ。

(…………タキオンの所へ急ぐ。)

~~~~~

ガラガラガラ

「タキオン、いるか?」

いつもの実験室へ向かうと、何やら中身の入った試験管がいくつかあった。暫く待つと相手は眠そうに目を擦りながら奥から出てきた。

「……………何だ、トレーナー君かあ……………ふああ……………」

「寝不足か?」

「昨夜は実験が捗り過ぎてね……………自室で実験をしたあともう時間が遅かったから早めに学園に来て寝ていたん……………ああ」

話の途中であくびを繰り返すタキオンだが……………こんな調子で大丈夫なのかと聞かれそうだが強く言おう、大丈夫だ。何故かって?それはタキオンはスイッチの切り替えが



とんでもないほど上手いのだ。ぐでーんとだらけていたと思えばそこにたまたま訪れたダイワスカーレットの応対をシャキッと普段通りにこなすくらいにはオンオフの切り替えをすることができる。というか寝不足になっても練習にはしっかり打ち込んでくれるし、寝坊もしないのでその辺はしっかりしているのだと思う。

(……) こういうトコは変わらねえな……)

「そうなのか……これ、朝食と昼食だ。」

「ん……? ああ確かそんな約束もしていたね……」

ゆったりと丸椅子に座り朝食の弁当を取る。先程詰めたのでまだ温かいので美味しい筈だ。

「結構時間を使いそうだ。」

「タキオン、言っておくが朝食は——」

「朝食の重要性は知っているよ。レースをするウマ娘たるもの流石に疎かにはしていない。ま、効率的に食べれるものが好ましいが」

「……そうか」

とか言っているが、彼女は効率と栄養だけ重視した結果ミキサーにぶち込んで飲料にして飲むだけという謎の食事になっていたが……まあ栄養も効率は悪く無いが見た目は不味い。これは持論だが、ヒトにも言えるがウマ娘という生物は物事を楽しむこと——

——つまるところテンションが大切なのだ。

楽しいから続けるというのは何にだって言える。例えるならゲームだ。何処に何があるのか、どの店にどんな値段で売っているのか。敵のステータスはどんなものなのか。これらは膨大な情報だが、熱中していると覚えるのは容易い。

楽しいから走る——これだけのことか？ どれだけのアドバンテージを生み出すのかは計り知れない。トレーニングを積み、レースで勝ち、更にモチベーションを上げる。この好循環が続く限り、モチベーションが続く限りそのウマ娘はとて強くなるだろう。

トレーナーをやって4年目だが、欲求に勝るスパイスはないと思っている。勝ちたい、何かを貰いたい、楽しい。それらの欲求を枯らさない為に動くのが俺達トレーナーの仕事だと思っている。

「ン……美味しい……」

タキオンの場合、実験と食事をしっかりとサポートしてやればモチベーションは保たれると知っている。

「……食べている途中だが今後について再確認しようか。」

「……………」カチャ……………」

一旦食べるのをやめて口の中にあるものを飲み込み、タキオンはこちらへと向かつ

た。

いや、食べるのをやめたというか、もう弁当の中身が無くなっていたという方が正しい。この速度で食べ終えるのであればまだ量を増やしても良いかもしれない。

「2ヶ月ほどの練習期間を設けてメイクデビューに出走する、だろうか？」

「その通りだ。この前に渡したメイクデビューまでの練習メニューを熟せば勝つ事は容易いだろう。」

「やけに自信たっぷりじゃないか。」

「あの選抜レースとここ数日行った検査の結果を踏まえてだ。タキオンが持っていた才能が良かったからこそメイクデビューを苦なく越せれるだろうと予測を立てた。」

ここで負けるといふ選択肢は無い。何故なら俺はURAを勝たせる為に過去へと戻ったのだ。同じレースを走るのなら全て一度は体験したレースなので全戦全勝を目指したくなるのは仕方がないことだろう。とか考えているが長距離はあまり出さないようにする。流石に足に掛かる負担が多いので不安なのだ。

（初勝利にはたったの2戦で勝てたし大丈夫だろう。レースに対しての本人のやる気も高いしな。）

メイクデビューまでまともに練習をさせてくれなかったあの日々を想起させつつ、タキオンに明日は多めに弁当を作っておくと伝えると満足そうに頼んだよと返事が帰っ

てきた。

今日は午前中は授業があるのでタキオンとは一旦別れてトレーナー棟へ向かう。

トレセン学園の教室の横に建てられているトレーナー棟だが、チームを持たないのであれば原則一トレーナー一部屋という割合になっている。中はそこそこ広く俺も不由したことはないのだが、一度チームを持っていて先輩の部屋を見せてもらった時は驚愕した。

ウマ娘とトレーナーにとってここは共に練習メニューを吟味し、レースの作戦を立てる場所……いわば”本部”なのである。しかし、先輩の部屋には大量の書類とコーヒーク缶と書類整理に追われるサブトレーナーの姿があるだけであった。

なんでもウマ娘に直接関係性があるものは全て部屋に運んだらしく、トレーナー室は全くの裏方……書類整理専用の部屋であったのだ。この事実を知った俺はトレーナーがどういふことなのかこの辺りから理解し始めていたがそれは別の話だ。

(いつか俺もタキオン以外のウマ娘を担当するのかな……)

なんて未来のことを考えながら俺はゆっくりとトレーナー棟へと向かうのであった。

~~~~~

side タキオン

時は飛んでメイクデビュー前。レース前ということで早めに練習を切り上げてタキ

オンは寮へと戻ってきた。同室のアグネスデジタルがまだ帰ってきていないことに、彼女もメイクデビューに出走する予定なのだろうかと思うも、タキオンはタオルとナイロンたわしと着替えを手に取って風呂場へ向かう。

脱衣所に汚れた体操服などを脱ぎ捨てタオルとナイロンたわしを手に泥を落とすために洗い場へ向かった。桶を裏返してタオルとたわしを入れ、くぐもった鏡にシャワーを当てると、鏡に反射された自身の身体そのものが目に映った。

(……………)

タキオンはこの2ヶ月ほど、この身体を清める作業の前に自身の身体を観察することをしているがその度に思うことがあるのだ。

それは目を追うごとに「もしや」から「これは」に変わり——今ではこれをする」と「喜び」を感じるまでになっているのだ。そして今日もそれは続く。

ずばり、タキオンを襲ったのは実感であった。

実感とは？

ウマ娘は日々成長する。が、その成長を実感するには本人に合ったトレーニングを積み、トレーナーの持つタイマーに表示される数字が小さくなったり、レースで結果を出してやっとな成長を実感することができるのだ。無論、身体能力が途轍もないほど高いウマ娘として一日で劇的に変わるということは非効率な走法を取っていたり、差しが得意な

ウマ娘が逃げで勝負するなどといったことを除けばほとんどないと言い切って良いだろう。

だが、あのトレーナーには知識があった。3年の月日を掛けて完成させたタキオン専用のトレーニングメニューが、100%のトレーニングは身体が追い付かないので程度を落としてはいるが、それでもタキオンの身体にスポンジの如く高い吸収率で身に付いていった。

メイクデビューは容易い。トレーナーはそう言った。

タキオンは疑問だった。メイクデビューに勝てず、未勝利戦でも勝てないウマ娘はごまんといる。もつといえば上の世界への切符を手に入れるウマ娘は少なすぎる。月に多くても数度しか行われないうレースで一着を取らなければ上へと行けない。仮に行けたとしても負け続きということもあるのだ。

ちなみにだが前の世界のタキオンは10戦6勝。G1を3勝しており、ウマ娘の世界では中々の戦績であったと言えるよう。

それはさておき、タキオンはあの新人の不確かな自信を信じれていなかったのだが、練習や食事などを通じてその自信が何も根拠のないものではなく、計算され尽くしたものだということを知りえた。

これを受けてタキオンの心が変わった。それは要するに……

——これは世界が、未来が変わったことと同義だ。

世界線30315f3034

メイクデビュー

最も行われたレースであろうこのレースは、数々のウマ娘の第二の登竜門、もしくは関門だ。ここで勝たねばOPやPre-OPのレースにすら出走を許されない。大成することができないのだ。実際に一度も勝てず地方のトレセン学園に転属するウマ娘もいれば、心折れて引退するウマ娘もいる。

そんな閻魔大王かのような（この場合勝っても天国とは言えないが）レースだが、俺の担当ウマ娘であるアグネスタキオンは今日出走する。

（パドックで他に有力そうなウマ娘はいなかった。そして一番人気となっている。――やはりこのレースは勝てる。）

全てが想定内。計算通りに進み、俺は心のなかで余裕を保っていた。

――ゲートにつき、スタート。

出遅れ無し、良好なスタートダッシュ決めてタキオンはいの一番に駆け出た。

『おっと!? 3番アグネスタキオン！ 良いスタートダッシュだ！ 既に後ろとの差は1/4

バ身だぞ!？」

「マジか——!」

決して本気のスタートダッシュではない。ゲート練習の時で全体の4割程度の回数で決めたレベルのスタートダッシュだが、他のウマ娘は誰も追いつけておらず、それどころか2位と半バ身程度の距離を空けている。

(これは……!)

『リードを保つアグネスタキオン。2位との差は変わらず半バ身です。』

『これは掛かっているのでしょうか?彼女は先行策が得意のはずですが……』

(いやアイツは掛かってなんかいない。)

たかが2ヶ月。されど2ヶ月。ここまででトレーニングによって鍛えられたスタミナとスピードは最早メイクデビューで戦うには狭すぎるほどだったのかもしれない。あれほどの走りができるのならばOPオープンを超えてG3レベルの重賞ならば勝てるのではと思える走りを見せている。

(だが……タキオンとて逃げが向いていないことは一番分かっているはず……)

どうして得意の作戦を捨てて勝負をしているのか。まさか……タキオンは、あいつは自分の身体にある異常を分かっていたようだった。まさかとは思うが、一気にトレーニングの強度を強くしすぎたことで既に限界を迎え始めているというのか……?だが昨

日の簡易的な検査では何も問題はなかった。

（とりあえずこのレースが終われば体の調子とタキオン自覚していることを聞き出そう。あとすっかりとケアを行って……大事をとって明日は体を使う練習はやめにして座学のみを行うことにしよう。）

URAを勝ってほしい。あの大きな舞台でタキオンを勝たせてあげたい。その目標を叶えなければいけない。チャンスはあと4回しかないのだから。

『アグネスタキオン逃げる逃げる！最終コーナーを曲がってもまだ誰も追いつけないぞ！』

『この展開は予想外でしたね。超光速と言われた末脚は見れませんでしたがこのままのペースだと逃げ切れるでしょう。』

『もう後ろとの差が何バ身かわからない！強いとしかいえないその走り——今大差でゴールイン!!!』

『これが伝説の幕開けかもしれせん。このウマ娘の今後の非常に期待ですね。』

（一先ずは一勝……だが。）

少々無茶をしたヒーロー称える為に俺は観客席から控室へと降りるのであった。

~~~~~

「アツハツハツハツハ！トレーナー君、今日の走りはとても良い走りだったんじゃあな

いかなあ!」

「ああ。確かに良かった。」

「トレーニングをこなせば勝つ……新人だとは思えないふざけた激励だったが、ふふ、なるほど君の言う通りだったよ。」

ここまでの過程で特にどこかを悪くしているということは見られない。実験に成功したかのような顔で腕を組んでウンウンと頷くタキオンにスポーツドリンクやストレッチなどのクールダウンの重要性を説きつつ少しだけ常温に近付けたドリンクを渡した。タキオンはそれを一気に飲み干し、ウイニングライブの為に着替えるというので俺を追い出した。

(……注意はやはりしておく必要がある。念には念を、どれだけ慎重になっても怪我を防げるのであれば損はない。)

ライブまでの時刻はあと40分程度だ。これくらいならば余裕を持って席を取れるとスタンドの更に外にあるライブ会場へ向かう途中、緑色の制服を着た女性——そう、トレセン学園理事長の秘書の駿川たづなさんである。彼女は俺に気付くと「初勝利おめでとうございます」と言った。初勝利という単語を不思議に思っただけで返答が少しだけ滞ったものの、自身がまだ新人であったことを思い出した。

「祝言ありがとうございます。次に向けて頑張りたいですね。当面の目標はオープン戦

で勝つことですかね。」

とまあこのような回答でいいだろう。彼女も満足した回答であったのか、それとも順調な滑り出しを見せたからかはわからないが笑みを浮かべていた。そのまま別れて会場へと向かおうとしたが、どうやらたづなさんはウイニングライブを見る予定だったらしく折角ですし、ということでご一緒することとなった。

「トレーナーさんは初めてのウイニングライブですよね？」

「ええ。そりゃあ。……あ、それとも初めてのライブ観戦ってことですか？」

「いえ、トレーナーになって初めて。ということですね。」

（トレーナーになって初めてということならば初なのだが……いかんせん時が戻る前の記憶があるからなあ……）

毎度のことながらつい言いそうになる本当のことを飲み込んで初めてだと答えた。

「そうですよね。」と返し、次に彼女はこう語った。

「ウマ娘にとってウイニングライブはどんな想いが籠められているのか知ってますか？」

「想い……ですか。」

自分あまり目立ちたいという欲求がないのでウイニングライブという行為についてはレースで応援してくれたファンへの感謝の念を込めて行うという、お手本のような

教科書程度の知識しかない。タキオン曰く「データが取りづらいから少し面倒」だと言っていた。他もどこまでもデータを求めるような発言ばかりだったが、思い返すと不思議と踊ること自体は嫌ってはいなかったようであつたように思えた。

「是非——トレーナーさん自身が見てその娘の想いを分かつてあげてください。」

「……つて、結局答えは言わないんですか？」

「はい。その方が担当ウマ娘のタキオンさんも嬉しいと思いますから。」

（……自分で見つける……か。）

そういえばタキオンがダンスレッツスンをしていたのは有馬記念の時が最後だっけ……ああ。そうだ。今思えばおかしかったのだ。ダンスレッツスは自分でやるからなんて言われたから任せっきりだったけど、URRのウイニングライブは練習している姿を俺は見えていない。……決して、タキオンは誰にも言わずに隠していたわけでは無かった。ただ、俺が「起こり」を見逃してしまっただけなのだ。あの時……俺が有馬記念——引いてはURRファイナルズの出走を止めて怪我の発生を防ぐことに専念していれば……

また胸に襲い掛かるあの感覚が、自分を許せぬあの感覚が襲い掛かろうとする気配を見せたが、それはライブ会場内の明かりが消えることでふっと消えてしまった。

（過去は……振り返らないようにしよう）

そうだ。大切なのはタキオンを無事にUR Aを勝たせることだ。

俺はそう決心して、ポケットからプラスチックの棒——サイリウムを取り出した。

そして檀上にタキオンや他のウマ娘たちが現れ、楽曲が流される。それに合わせて熱烈なフアンの間で流行っているダンス、所謂ヲタ芸を披露するのであった。

ライブ後、たづなさんには驚かれ、タキオンはあまり自分の名前をコールしないでほしいと言われてしまった。

## 世界線30315f3035

メイクデビューを見事勝利し、デビューを果たしたタキオン。話し合いの結果、次のレースは9月に行われる最初のOPレース。芙蓉ステークスを走ることに決めた。得意の中距離のレースをわざわざ待つので、ここは勝って重賞のレースへの出走権を得たい所だ。

タキオンの練習は順調だ。練習強度を少し上げ、更にスタミナとスピードに磨きを掛けていている……のだが、スタミナばかりが伸びているような気がする。あまり偏ってバランスの悪いトレーニングをしている筈ではないのだが……やはり差しや先行を得意とする以上スピードは欲しい。これからはスピードを上げることを念頭にトレーニングを続けることにする。

(体育館は今日は使えないから……ジムでフィットネスバイクとランニングマシンで調整しつつ、坂路を走らせて終わりかな。)

少々キツイが休日なので時間はたっぷりある。朝はジムで、昼食を取って昼からはグラウンドで練習だが、未だ8月だ。熱中症対策にドリンクや傘と折りたたみ椅子で簡易休憩所を作っておく必要があるだろう。

（確か先日の練習で買い置きが無くなったからあとでドリンクを買わないと駄目だな。……ほかの備品は……大丈夫か？）

忘れないようにメモに書き込みながらもパラソルと椅子をナイロンヒモで固定する。以前に括った時は固結びをしてしまい切断してしまったので何度でも使い回せるよう蝶々結びで縛った。それらを背負い、記録用のノートやペン、カメラ、クーラーボックスなどを持っていく。

「鍵よし、財布よし、弁当よし。行くか。」

準備が整ったのでジムに向かおうとドアを開けると、そこには一人のウマ娘が立っていた。

彼女の名前はダイワスカーレット。タキオンに連れられて観戦したあの秋華賞でのウオツカとの大接戦は興奮した。……いやあ……凄かったなあ……

話を聞くに、ダイワスカーレットはどうやらタキオンを待っていたらしい。こんなに早い時期から交友関係があったのだと驚いたが彼女をタキオンの所へと案内することにした。途中、彼女から荷物を持つとうと提案されたが断った。流石に持たせるのは悪いからなあ……

「随分と荷物が多いいですね。」

「ああ、熱中症対策にパラソルと休める椅子。そして水や万が一の時の為に経口補水液



も入れてある。あと弁当かな。」

「弁当……あつ！もしかしてタキオンさんのお弁当ですか？この前一口貰いましたがとつても美味しかったです！」

「そう言われると嬉しいなあ。」

やはり美味しかったと言われる分には嬉しい。だって作り甲斐があるもの。

やれ甘めの味付けにしなければいけないとか、やれ作ってもらえないだとか弁当の会話に花を咲かせつつ、ジムへと到着した。

トレセン学園ジム——その設備の多さは折り紙つきで、具体的にはランニングマシーンからエアロバイク、果てにはサンドバックまでもが配置されており他の追隨を許さない。また、数時間連続しての使用には予約が必要であり今日は4時間ほどの予約を取っている。予約はトレーナーもウマ娘もどちらでも取れるのだが、やはりターフを走った方が好いたため雨の日以外はあまり入らない。逆に言えば雨の日は満員だ。

（風の噂で設備を100倍にするなんて聞いたけど……ま、そんな金も土地もないし実は無理だろう。……いや、理事長ならばあるいは……？）

「——飲むかそんなモン!？」

「おや？私はそこで買ったスポーツドリンクを君に差し入れようとしているだけじゃないかシャカール君？」

「オレの知ってるスポドリはそんな色してねエよ!!!」

何を話しているのかと伺ってみるとエアシヤカールに薬を渡そうとするタキオンの姿があった。休憩所というか、ベンチでそんなやりとりをしている為に誰も近づかず半ば占有してしまっているので注意をしよう。

「タキオン。」

「おや、トレーナー君にスカーレット君じゃないか。」

「タキオンさん!この前の美容液の——」

仲が良さそうに会話をする二人であった。タキオンはダイワスカーレットには何か思うところがあるのか、とても当たりが優しいのだ。実験的なことはあまりせずにごうやう美容液や日焼け止めクリームなどの全く害のない製品をテストさせている。確かそのことについてマンハッタンカフェが扱いが違うだとか言っていた覚えがある。

「アンタが……タキオンのトレーナーか?」

「何か、用が?」

「いや……今日は光ってねエんだな。」

「……多分、もう少しで光るから……」

「なんか……ワリイな……」

別に光ること自体は嫌いじゃないんだが……いかんせんイメージがな……

アグネスタキオンのトレーナー。ではなく、光っているトレーナーとして覚えられていた。光ってないと誰……？みたいな反応になるのがつらい……インタビユーとかで今日は光ってらっしゃらないんですねとか言われるとねえ……？まあそりゃあ光らせてサイリウム人間とか自分でやってたけど、それはそれとしてだ。

モルモットにも人権はあるのだよ。

「ああ、そうだ。トレーナー君、今度はこれを飲んでくれよ。」

紫色の液体が入った試験管を手渡される。……二人の飲むのか……？という疑念の目線が刺さるものの、先程も言った通り別に光ること、つまり薬を飲むことは別に苦じゃないのでグイツと一気に飲み込んだ。少し粘度が高く、大体ぬたくらいのねっとりとした液体であつたが何とか飲み干せた。

「ん……？うおお……ツツツ!!」モリモリモリ

「うおツ!!」「わあッ!!」

「うーむ……もう少し配合する割合を見直してみるか……」

何と、真つ赤に光る髪の毛が伸びてきたのだ。髪はどんどん伸びていき、大体腰ほどにまで伸びると止まった。

「タキオン、これは……?」

「本来であれば感覚器官が鋭敏になる薬だが……何故か髪が赤く光って伸びるといふだ

「けの薬になってしまったようだ。」

「出来れば今度は床屋の世話にならない薬にしてくれ。」

「えエ……」

「何故かドン引きしているエアシヤカールであったが、それよりも俺はこの髪の毛はラ  
イブの時に振り回せばいい感じになるのではないかと期待を寄せた。」

## 世界線30315f3036

「……………うーむ」

自宅の鏡の前で悩んでいる俺。勿論髪の毛についてだ。

……ハゲの話じゃないぞ？まだ20代だし、今はタキオンの薬によってロン毛だからな。

まあ、そのロン毛が問題なんだが。

タキオンの実験は良いのだ。光っても別に問題はないしその内光量なんかもコントロールもできるようになる。だが今回は髪の毛だ。赤く光っていたのは元の黒い髪色に戻ったが、厄介なことにロン毛で固定されるらしく、また新たな薬を服用すればするほど伸びるようになっていく。初めて飲んだ時は腰ほどの高さであったが、今はもう尻を通り越してふくらはぎ……いや、ほぼくるぶしの辺りまで伸びてしまっている。前髪は後ろと比べるとさほど伸びていないが、それでもヘソまで伸びていた。

(タキオンに頼んで髪を短くする薬を作ってもらおう……)

流石に長すぎる。昨日もドアに挟まって痛かったし、下の方は土で汚れていて汚い。

いやまあ、こんなことを考えていられるのも現状でタキオンに勝てそうな相手がいな  
いからなんだが……本当に警戒するのはG3より上で出走できるウマ娘でいいだろう、  
OP以下で留まる程度ならば悪いが話にならない。今日行われるレースもまた然りだ。  
勝てるレースなのだがタキオンは滅茶苦茶強請ってきた。「今日のレースで一着を取  
ればなにか”ご褒美”が欲しいねえ……うんうん、担当バが一着を取って祝わないト  
レーナーなんていないだろう！そうだろう！」

——全くもってその通りです。

そもそも中央のレースで一着なんて世間一般のウマ娘なら諸手を挙げて祝われるレ  
ベルなのだ。重賞なんて取ればもうそれはすごいことになる。実際に俺の地元でもそ  
うだったし、なんなら俺もそうだった。

タキオンは素で勝ち抜く力があるのだ。だが、早熟故か伸びが悪くなっていくのだろ  
うか。

(このままスピードが伸びなければ……皐月賞は厳しい、か?)

以前より長距離を走れるようにはなったがそれと引き換えにスピードが落ちた。タ  
キオンの持ち味は末脚だが……ううむ。

~~~~~

レースでは危なげなく勝った。今回も逃げ切つて最も早く到着し、芙蓉ステークスを制した。

ご褒美と称して薬を飲んだので腕が光っているのだが、当の開発者本人は作つてあげたスウィーツに舌鼓を打っている。……緊張感が無くて呑気だとは思うが、レース後なので見逃すことにしよう。

「タキオン、これが現時点までの2000mのタイムだ。」

5月、6月、7月と右肩上がりにタイムが伸びているのだが、8月と9月は以前までの伸び率はなく、ゆったりと上がっているだけであった。

「ふうん……やはり伸びが悪くなっているねえ……」

「ああ。現状、タキオンのタイムはあまり伸びていない。レース後に検査をもらったが特に異常は見られないと診断された。」

診断書をタキオンに渡す。ここトレセン学園では病院まで完備されているので異常があれば直ぐに駆けつけたり、即検診を受けることが出来る。まあ、あくまでも簡易的なものだが……ちなみに言うと、タキオンは少し離れた大きな病院にて本格的な検査を行っている。いや、信じてない訳じゃあないが……タキオンのケガを発見したのもあの大きな病院だったからだ。

「そこだ。この状況は今後の方針を変えるかもしれない局面になりうるから、タキオ

ンから意見を聞いておきたい。」

「……クラシック路線——速さを追求するという目的がある以上、ここだけは譲れないよ。」

「わかった。……だけどどこが伸びていないのか探る為に明日明後日はいろんな距離を走るから。」

「私としては十分に育っている感覚はあるのだけどねえ……だがまあ、グラフとして見ると確かに伸び悩むと言ってもいいくらいだ。」

「伸び悩むとしても時期が早すぎると思うてな……よしじゃあ今日のミーティングは終わり！明日に備えて身体を休めるように！」

「わかっているよ……ああでもこの後は実験に付き合ってもらおうけどね。」

「薬か？」

「いや、そうなんだがこれは少々厄介な——」

何か、うまく言い表せないが漠然とした不安のようなものを感じながらも、俺はタキオンの実験の概要を聞き出すのであった。

世界線30315f3037

「わざわざ悪いね」

「いえ……あんまりコーヒー好きなきがいないので……」

俺は食堂の一角にて、とあるウマ娘からコーヒーを貰っていた。しかも豆を挽いて淹れたものだ。香りも良く、味も良い。うーむこれは良い豆だ……

「意外でした……タキオンさんのことだから食事制限でも付けてるのかと……」

「いや食事制限って……確かにやりそうな雰囲気ではあるけどもタキオンはそんなことしないよ。精々10キロほど走らされるくらいだしね。」

自分の——もしくは他のウマ娘の速さの限界を見たがるタキオンだが、流石にそういった道徳心は持ち合わせている。あとダイワスカーレットには滅茶苦茶優しい。

（彼女も度々実験に付き合わされていたし、恐らく四六時中実験のことを考えているマッドな奴とでも思っているのだろう。）

無駄だとか合理的じゃないなんて省いているけど普通においしいものが好きだしオシャレも嗜むし、本当に実験さえなければ普通の女の子だ。……いやまあ、実験のせいで9割くらい台無しになっているが……それでも一般的な感性を持ち合わせていると

思う。

コーヒーを貰ったウマ娘はマンハッタンカフェである。ライバルとして様々なレースを共に走り勝敗を争った相手だ。彼女は生粋のステイヤーで菊花賞ではタキオンに勝利した他、春の天皇賞などで一着を取っている。タキオンの最後のレースとなった有馬記念でも3位に食い込んでおり長距離を走り切るスタミナが取り柄のウマ娘と言えよう。

何故コーヒーを貰ったのかは分からない。缶コーヒーならいざ知らずわざわざ手挽きのものを振る舞われるという経験なんてあった試しがない。しかも中々上等なものだと思うのでますます何故俺なんかにと疑問が生まれてくる。そんな疑問を他所にマンハッタンカフェは耳をピンと立ててコーヒーをチビチビと飲んでいる。それにしてもこのコーヒーは美味い……これほどならば彼女のようを買っても良いかもしれない。——いや、買っても手軽さを求めてインスタントばかり飲んで結局トレーナー室の置物にでもなりそうだ。

それぞれ苦味と酸味と良い香りを味わい、心の内では思い思いのことを考えているのだろう。マンハッタンカフェは少しずつ飲まないとお腹を痛める為必然的にトレーナーが先にコーヒーを飲み干すこととなった。

「良いコーヒーだった。インスタントや缶コーヒーばかり飲むけど、そうやって君みた

いに豆から挽いて飲みたいと思ったよ。」

「……ありがとうございます。」

彼女は少しうれしそうに答えた。

「このカップは返却口にでも持っていけばいいのかな？」

「いえ、私が返しておきます。」

「そう？——……いや、やっぱりご馳走になった身だし返しておくよ。」

「気にしなくても……それに、それは……私のですから、持っていかななくても。」

「……そうだったのか。ごめんね、気を使わせて。またいつかコーヒーの礼をするよ。」

「いえ……大丈夫です。」

大丈夫——と言っているがこっちの気が収まらない。タキオンの実験は俺の目の届く範囲では止めるのであまり礼とは言えない。コーヒーの豆なんかは……マンハッタンカフェはそういうのは厳しそうだ。トレーニングに役立ちそうな何かを送ることに決めて、彼女と別れた。

「ゲ、こんな時間に……タキオン絶対怒るじゃん……」

時計の短い針はどちらかと言えば左の真横の方が近く、このままだと『遅いじゃないかトレーナーくん？お腹を空かせた大事な愛バを待たせるなんて酷いじゃないか。』とか言って実験されそうだ……何本飲めば許してもらえるかな……

あくあとボヤキながら今頃恐らく俺に飲ませる薬を調合しているであろう担当バから投与される薬の量を減らすためにトレーナー室へ急ぐのだった。

世界線30315f3038

葉が赤く染まりきり、すっかり慣れた北風によつてもう半分以上の葉が落ちたのではと思つてしまふ時期。ジュニア期の重賞を争つてレースが開催された。

京都ジュニアステークス——中距離を主戦場とするウマ娘にとつて、今後を左右するであろうGIレース「ホープフルステークス」に出走する足掛かりとなるレースだ。幸いにもタキオンはこのレースを望まなかつたので今回はGⅢ勝利でGⅡレースへの優先的な出走権を得る為の目的、いや、「通過地点」といった方がいいだろう。

だが……現状タキオンは伸び悩んでいるというのも事実だ。以前に全距離のタイムを計測した結果、担当となつた時にどの距離が得意で、どれほど走れるのか——という目的で短マイル中長すべての距離を走らせたが、今回最もタイムが伸びていたのは長距離であつたのだ。いくら走り切れる体力がついてもタキオンの最も得意とする距離は中距離なので、測定するにあつて走らせた3000Mという距離は必要がないのだ。厳密に言えばクラシック路線なのだから菊花賞を走らねばならないのだが……怪我が怖いので長距離はあまり走らせたくない。

しかし、現状の伸び率のままでは皐月賞に勝てるかどうか。スタミナにものを言わせ

てハイペースな逃げをさせてもいいがタキオンは逃げはあまり得意ではない。しかし速度を伸ばす為に練習を積ませているが……皐月賞まで残り5か月ほどだ。メニユーを変えて効果を得れるかは微妙な期間だと思うがそれでも足掻くには十分な時間だろう。

『晴れ渡る青空の下で行われるこのレース。各々のウマ娘がこれからトウインクルシリーズを駆け抜ける上で非常に大事な一戦となります。』

『王道の距離ですから、これからスターとなる選手も登場するかもしれませんね。』

『今ゲートに入った3番人気の5番。』

『パドックでは愛想よくしていましたね。3番人気となりましたが気合十分といった感じでしょうか。』

『2番人気、3番。』

『前はマイルレースを出走しましたが、中距離でも結果は残せるか期待ですね』

『最後に入場一番人気アグネスタキオン。』

『逃げから差しまで幅広い戦術を取れるウマ娘ですね。大外枠ですが今回はどういった作戦でくるのでしょうか。』

『各ウマ娘ゲートに入りました。』

パドックからここまで全て見てきたがタキオンの敵になりそうなウマ娘はいないよ

うに思える。……おかしいな、重賞だというのに全く緊張しないというのは初めてだ。(怖くない……この感覚は重要かもしれないな……)

トレーナー歴たった3年の俺だが勘が研ぎ澄まされているのかもしれない。……つまり、皐月賞が怖いという事は——いや、考えるのは止そう。

『——スタートしました。ああッと、4番大きく出遅れたか!』

『なんとか遅れを最小限に止めた形ですね。』

『先頭は6番、9番、11番の三人が横並び、後ろに5番が付いている。それに続いて3番、16番、アグネスタキオン、17番、13番、7番、少し離れて1番、14番、15番、2番、最後方は4番、8番、10番、12番。』

『それぞれ得意の位置につけていますね。出遅れた4番も上がってきています。』

『第一コーナーを曲がって頭一つ抜けた6番。9番は内、11番は外を走る。すぐ後ろには5番がいるぞ。』

『続けて16番、3番は位置が逆転。アグネスタキオンはその後ろ、その横17番は外に出過ぎてきているか?』

(硬直展開だな……前は6人だがタキオンはかわせるか……?)

『上がってくる4番、差すにはまだ早いぞ!』

『掛かっているかもしれないね。冷静さを取り戻して欲しいところです。』

あれは落ちたな。と4番に憐みの目を向ける。出遅れると取り戻すために無駄にスタミナを消費してしまうし、遅れたということで気持ちが高ぶりすぎて追いついているのに前に出過ぎてしまう悪循環に陥る可能性があるのだ。まだジュニア期なのでこれが彼女の今後を良くすると思つて前向きに捉えた方がマシだろう。

『レースは中盤、先頭を走る6番、11番とのリードは半バ身。9番は後ろへ下がって体力温存か？5番と3番内の取り合い、最後尾12番外へと動いた。』

『12番はコーナーを曲がりながら抜いていくつもりでしょうか？この混戦具合は後ろの子たちは前を上手くかわせるのか見どころですね。』

『最終コーナーを曲がつて6番先頭、9番11番は少し外へ5番は伸びないか？』

『アグネスタキオン内から抜いた！前を走る三人を抜いて一気に入着圏内に近づいた！』

『これは……前3人を抜くには厳しい位置取りでしょうか。』

『後続の子たちも上がってくる！アグネスタキオン位置が悪いか!?最後尾12番大外からトップ争いに参加した！残り400——内から強引にアグネスタキオン！同じくトップ争い！』

『内ラチに擦れながら強引に突破しましたね。』

『残り200！内と大外この二人が争——わない！アグネスタキオン速い！前が無け

れば、その末脚を遺憾なく見せつけて……今ゴール!!」

『優勝はアグネスタキオン! 2着は12番! 3着は6番!』

~~~~~

レースの休憩兼ウイニングライブの準備の最中、タキオンと俺は少しレースの反省会をすることにした。

「ふうん……今回は少し内に入りすぎたか」

「大外だからって内を狙いすぎだ……あの走りじゃGI……いやGIIIであっても危ういかもしれん。」

ズバツと切り捨てた俺の言葉にタキオンは一瞬動揺したように見えたが、すぐに顎の下に手を当ててどうしてかと聞いてきた。

「最後——抜くときにラチ擦りながら走っただろ?」

「ああでもないとしてスパートに遅れてしまうからね。私にとっては必要なことだったのだよ。」

「ああ。そうだ。でもそれが駄目なんだ。」

「……………君、言ってる事が滅茶苦茶だぞ?」

「はあ……………これ、ここ見ろ。」

「柵に擦れて少し黒くなったただけじゃないか。」

「今回はその程度だった……ジュニア期の初の中距離GⅢだからな。だがこれから先はこころも行くまい。強引に突破ばかりしているといずれ怪我をすることになるぞ?」

「なんだ……そんなことか……」

「そんなことつて……」

「いやいや、確かに担当ウマ娘の怪我を防ぐように努めるのがトレーナーの仕事だがあの程度でいちいち止められていては困るのですね。……いや待てよ……そういや君、新人だったね……ふうん」

意味ありげに相槌を打ったタキオンであつたがその真意は推し量れなかつた。そうこうしている内にシャワーをして着替えるからと楽屋を追い出されてしまった。

(全く……怪我をしたらどうするんだ……)

一度の怪我が致命傷となりうるのだからホイホイされたくない。というかあんな思いはもうしたくないのだ。

(ライブ後は入念にケアをして……団子状態の中団から上からさせる練習でも考えようか……こればかりは誰か得意そうな子でも見つけて協力して貰わないと……畜生、チームとはいかなくとももう一人担当ウマ娘を持ってたらそんな練習もできるんだけどな……)

ちなみに今回は手に持つサイリウムの数を減らしたから大丈夫だろう。これでタキ

オンのことを応援できる。

## 世界線30315f3039

年が明けた。

ここトレセン学園でも正月ムードになっておりウマ娘たちは餅つきや羽根付きなんかもしていた。とはいっても練習を行っているウマ娘もいたりとお祝いムードは束の間の休息なのである。学園のお偉いさん達は今頃樽を木槌で割っている頃だろう。

ちなみに今はタキオンに雑煮を振る舞っている。なんでも甘い雑煮が食べたいねえ……トレーナーくん？と言ってくるものだから適当に作っているのだ。ちなみに場所はグラウンドの一角を使わせてもらっている。許可を取るに当たってたづなさんには少し呆れられたようだが頼まれたものは仕方がないだろう。

という訳でテーブルとコンロを用意して雑煮を作っているのである。専用の部室なんかあるのであればそこでやりたいのだが我慢だ。え？トレーナー室はって？いやいや、あそこ火気厳禁だから。

「こんなもんか。」

「できたかいトレーナーくん。早くよそつてくれよ。」

「あんまり急いで食べると火傷するぞ。あと餅にも気を付けろよ。」

「分かった分かった。」

せつやかなので自分の分もよそう。うーむ我ながら懇親の出来だ。パイプ椅子に座って冷ましながら雑煮を食べる。

「あつ！タキオンさんとタキオンさんのトレーナーさん！明けましておめでとうござい  
ます！」

そんな俺達を見つけたのはダイワスカーレットとウオツカだった。新年の挨拶を二人に返したところであだ帰らせるというのもと思ひ雑煮を分け与えた。二人とも好評だったらしくおいしいと言ってくれるのは嬉しかった。

「そういえば二人は今年からデビューするの？新年だし抱負とかは聞かせてもらって  
いいかな？」

「抱負……ですか（かあ）……」

「やりたいこと、叶えたいこと、変えたいこと……まあ目標みたいなものでいいよ。」

タキオンにも考えさせ、二人の悩む姿をたかだか数分眺める。だが中央のトレセン学園に来るだけはある。二人は思いついたようで言わせてみる。

「アタシは“一番になる”です！」

「結局いつもと同じじゃねえか……」ボソ

「一番になる……か。その心は？」

「レースでも、勉強でも……なんだって一番じゃないと嫌なんです。だから一番になりたい。一番になるに決めました。」

「相変わらず途方もない目標だねえスカーレット君は……」

やれやれといった表情のタキオンだがお前も速さの可能性の果てを見たいという目標があるだろう。その点は彼女と似たようなものだ。俺はそう思いながら次に言われるウオツカの抱負を待った。

「オレは“カッコよくなる”です！」

「アンタも同じじゃないの……」ボソ

「カッコよくなる……？うーん、抽象的でわからないから説明して貰える？」

「えと、オレは実は昔見たダービーに憧れてトレセン学園に入って来たんです。どんな展開になっても諦めない先輩達の姿を見て、自分もああいう風にカッコよくなりたいて思ってる。」

へえ……そんなことがあったのか……

ウオツカはG I レースを何度も取っていたウマ娘だし、てか彼女の言う憧れのダービーで勝ってたしな……彼女らはそれぞれの道を歩みあい……そしてクラシック級で有馬記念という場であの歴史に残る大接戦を繰り広げた。

ちなみにダイワスカーレットはトリプルティアラのウマ娘だった。気軽に接してい

るが——いやはや、なんともすごい娘たちなんだよなあ……

「なるほどねえ……タキオンは？」

「まあ、君なら分かるだろうが……もちろん速さを追求するだけだ。所詮レースはその過程にあるだけだよ。」

「か、カツコイイ……！」

「タキオンさん……！」

タキオンの言葉にキラキラと目を輝かせる二人であつたが俺は「過程つて……そりや軽く見すぎじゃあないのか……？」と突つ込まざるを得ない。いやしかしこの時点でタキオンはGⅠの難易度を知らない訳だし……

「うーん……」

ひとしきり話を終えると鍋が軽くなつていたので解散ということになつたのだった。  
~~~~~

正月ムードも終わり、再び日常が戻つてきた時のこと。俺はクラシックの最初のレースである皐月賞に向けて優先権——有り体に言えば出走権を得る為のトライアルレースである弥生賞への出走登録をしていた。何故弥生賞に出るのかと言えばタキオンは3戦3勝なのでGⅡでは抽選外れはほぼ無いのだが、流石にGⅠレースでは分が悪いと判断してのことだった。

出走の抽選結果と他の出走ウマ娘、タキオンの今までのデータを記録している用紙を見てみた。ここには各距離のタイムは勿論、全力疾走の1ハロンの速度に、ラスト600mの速度（上がり3ハロンともいう）身長、脚の長さ、靴のサイズ、蹄鉄の重さ、走行フォーム…etc

兎に角タキオンについての様々な情報があるのだ。

（弥生賞は2000m……走りきれぬ距離ではあるが……）

唐突だが「蒸発」という言葉を聞いたことはないだろうか。

科学の実験でやった人が大半だと思うが、蒸発とは液体を沸騰させることで気化させることだ。食塩水の水を気化させることで食塩を生成したり、今日の生活には欠かせないものだと思うっている。

今のタキオンは蒸発する際の温度のグラフのように緩やかに頭打ちだということを記録は表していた。

早すぎる天井に俺はどうしたものかと頭を悩ませた。

メニューを変えるか、別の方法でトレーニングをするか……いずれにせよ、大きな転換期であることに俺は一抹の不安を抱いていた。

世界線30315f3130

『バ群に？まれていたアグネスタキオンがここで猛追！しかし間に合わない！ウイニングチケットがゴールを超えた！ウイニングチケット完勝だ！7番とナリタタイシンがもつれ込んで2着争い！大波乱のこのレースを制し、皐月賞へのチケットを得たのはウイニングチケットでした——ッ！』

~~~~~

「……すまない、タキオン。」

今、楽屋の中にはタキオンが入っている。俺は励ますことも、慰めることもできずに一人ドアの前でつぶやくことしかできなかった。

結果から言おうか。

タキオンは敗北した。負けたのだ。タキオンは完全にマークされていて実質的にレースを行ったのはほぼ4人だけであつた。それ以外はタキオンの左右と背後につき、前を走っていたウマ娘が”たまたま”失速した為に前を塞がれて囚われたままレースを終えた。これらの潰し合いを回避できたのは2人の逃げウマ娘とウイニングチケット、そして最後方のナリタタイシンだけである。幸いにも前を走ったウマ娘は妨害とし

て降着判定が下され繰り上がってタキオンは5位となりなんとか入着となったがほぼ誤差であろう。先ほど降着を受けたウマ娘が抗議しにいったが覆されることはないようだった。

入着したとはいえ敗北には変わりない。

(よもや——の展開であった。あれほどのマークを受けて5位になれたのだ。むしろ褒めた方がいいだろう。)

次のレースまでにこれらの原因究明の考察が必要だと考え、一体何がマークを受けるようになったのかと考える。時を戻す前も含めて今まであのようなマークを受けることはなかった。そしてクラッシュク初戦ということにも不思議に思う。あの時はシニアまであまり結果を残せていなかったが……まさか、そういうことなのか……？

だが……タキオンのようにGⅡレースまで無敗という戦績は初めてでもなんでもない。警戒こそすれどしつかりと相手を研究すれば自ずと対策は見えてくる。タキオンの得意な脚質は差しと先行であり、今回は差しだった為先行のウマ娘は途中でマークを外すということも出来たはずだ。果たして何故あそこまでしてマークを続けたのか……？

(……ん?)

ちよつと待て。

——今回の戦績の3戦、『逃げ』と『先行』でしか走ってねえわ……

タキオンの能力が高い為になるべく駆け引きの少ない前を走らせていた。メイクデビューは完全に想定外で、他との単純な性能差が出てしまったので結果的に逃げのように見えただけがOP戦とGⅢでは駆け引きはなるべくせずに出る前に自身のパースで走れという指示を出した。

ううむ、確かにそうだ。サイレンススズカやマルゼンスキーが少し後ろにいたらそっちをマークするだろう。

(ああクソツッ！策士策に溺れるということか……)

そういうこともありえるということに俺は自身の経験と知識不足を後悔した。タキオンのウマ生は一度きりなのだ。こんな少し工夫すれば良いことで負けていては怪我を防ぐことはできない。きつとこの先の未来だつて……

ガチャ

「——タキオン……すまない！俺が、もっと好い練習をさせていれば……！お前に様々な状況を体験さ——」「次だ。」

タキオンは俺の方を向き、その茶色の虹彩が備わった眼でしつかりとこちらを見据える。その表情はいつも見るような思案でもなく、決意に満ち満ちている。

「5着だった……皐月賞には出れないかもしれない……だから——次に備えようと思



通り過ぎたダイワスカーレットを俺は急いで呼び止めるのだった。

## 世界線30315f3131

たまたま通りがかったダイワスカーレットを見て、久々にこれだ！ときた。この感覚はタキオンの末脚を見た時くらいじゃないのだろうか。閃きと問題解消の足掛かりを見つけれのはとても好いことだ。

「ダイワスカーレット、良ければ君に頼みがあるんだ。」

「頼み……ですか？」

疑問が顔に出ているが、そりやあそうだろう。先輩のトレーナーに挨拶をしたただけいきなり思いつきのような頼みを聞かねばならないのだ。

とまあ、それは一旦置き。まずはどうしてダイワスカーレットを見て思いついたのかということだ。察しの良い人なら気付いているかもしれないが、彼女にタキオンとのトレーニングに付き合ってもらふことにするのだ。まだデビュー前とはいえ、彼女の逃げはマルゼンスキーやサイレンススズカ……は規格外すぎるし同じレースを走っているのを見たことは無いので両者よりも強いとは言えないが、匹敵するほどの走りだと思っている。トレセン学園で見ても逃げならば上位に入るだろう。まだ磨かれていない原石の状態ではあるものの、タキオンが体験させる分には十分すぎる経験を得ることだろ

う。

何よりも相性がいいのだ。前にも言った通りタキオンは実験のせいであまり交流がない。だからこそ並走でもいいのでしませんか？と誘っても（実験されそうだから）いいです……と断られるのだ。俺は無許可で実験は認めないというスタンスなのだが、相手からはトレーナーぐるみで実験を行われそうだと思われているらしい。これはちよつと謂れない中傷じゃないだろうか。話は逸れたが、兎に角相手がいない問題はどうしようもないので他に何か案を考えていた所にダイワスカーレットの登場だ。彼女を見た瞬間にそうだ！数人だが彼女の知人に頼めば良いじゃないか！という着想を得た。ダイワスカーレット、マンハッタンカフェ、エアシャカール……あと同室らしいアグネスデジタルも頭数に入れてもいいのだろうか。とにかく彼女ら4人はかなりの実力者だ。彼女らの協力を仰げるのであれば刺激を受けてタキオンの成長につながるのではないだろうか。

そのようなことをかいつまんでダイワスカーレットに伝えると、是非とはいかないもののかなり好意的な反応を見せてくれた。色々と話すうちにウオツカが来たのでお礼と別れを告げてその場から去ることにした。

とりあえずあまりメニューを詰め込み過ぎず並走程度からどんどん強度を上げて行くこうとダイワスカーレットを交えた練習案を練っていく。脳内メモじゃ足りないの

ポケットにしまつてあるメモ帳を取り出そうとして無いことに気付きたトレーナー室へと取りに帰るのであった。

~~~~~

side タキオン

前回の敗戦から数日が経った。今までの為に負けてしまったことは残念に思うが、負けないウマ娘など存在しないのだ。気持ちを切り替えて皐月賞へと向けた方がいいだろう。

弥生賞が終わつてからずっと思いつめたように何かをブツブツと喋りながら作業をしていたトレーナー君に気分転換程度にと追い出すと、練習、レース、作戦、果てには買い出し時にまで彼が肌身離さず持つている分厚くて、少しくたびれているメモ帳が机の上に置いて行かれていた。

メモというよりかは、小さなルーズリーフの紙を綴じているだけなので長編推理小説かのような分厚さにまでなっている。表紙から察するにこれは2冊目のようだ。

(ふうん……：毎日のトレーニングというより、乱雑に思いついたアイデアを書き留めるものようだ。いくつか付箋もついていて、どこの内容がどのページと繋がっているのかわかるようにしてある。メモというよりかは……：備忘録というようなものだろう。)

彼の机を物色する。引き出しの中にとんでもないほど分厚いルーズリーフの束たち

が出てきたので中を見てみると、料理に関してであったり、私の好みについてのメモ、更にはウマ娘の栄養学の論文のコピーなんかもあった。

重要なのもう一つは骨折などの怪我についてであった。

「——これは。」

一際分厚いその冊子には、ありとあらゆるウマ娘の怪我の症状。軽度の擦り傷から始まり鼻血や病原菌による疾病に流行り病など、果てには肌荒れ、寝不足などの生活習慣に関するものまで集められていた。ここまでで一つのカテゴリであり、次はそれらの療法やどのような医薬品による回復が望めるものなのか記されている。笹針という迷信めいた療法まであったことから回復の見込めるものはどんなものでもあらかた集めたのだろう。これより後は怪我を防止する論文の山だ。

正直なところ、これらは彼のようなトレーナー歴半年の新人トレーナーが集めているものではないように思える。受け継いだものか、どこからか借りてきたものなのか。どちらにせよ怪我に対しての異常な執着が伺える。思い返せば彼は内ラチを強引に突破した際には今まで私がどんな実験を実行しても保っていた柔らかな雰囲気とは打って変わって本気で止めさせるといふオーラを纏っていた。

「ただの心配性なのか……それとも……」

トラウマ——過去の体験により怪我という事象への忌避か。

(私が……怪我か。)

そんな未来可能性もあるかもしれない――

だがまあ、この分だと私が研究するまでもなく彼が全身全霊を掛けて予防に努めるだろうが。

世界線30315f3132

「……ハアツ……ハアツ……トレーナー君ッ！」

「……——ああッ！ 凄いでッ!!!」

弥生賞を敗北後、ダイワスカーレットを練習に招き並走などの軽めのトレーニングと一緒に積ませていた。タキオン自身も思うことがあるのか練習のグレードを落としてでも彼女と一緒に練習をしようという意思を見せていた。

それから数日後——

—— 皐月賞への道は断たれた。

抽選枠に応募した結果は×というものであったが、俺とタキオンは続けてトレーニングに励んだ。タキオンの夢を潰してしまったことには申し訳なく思ったがタキオンは不測の事態はよくあることだと返して、いや、赦してくれた。

タキオンはこれによって躍起になったのか練習に精を出すようになった。一週間、二

週間とそれが続く内にタキオンの身体にある変化が起き始めた。それは肉体の急激な成長である。身長も伸びている。体重も増えている……のかわからないが、身長分くらいは増加しているのだろう。ウエイトと足の長さが長くなったことにより一步の距離とパワーが段違いに上がっていき、次のレースと決めた京都新聞杯の距離、2200mを走らせるとこれが面白いことに8秒以上自己ベストを更新してしまったのだ。

この大幅更新以降、走れば走る度に記録を塗り替えていく。
俺はタキオンにドリンクを渡し労うと今後についての最終確認をした。

「タキオン、ダービーの件についてだが……」

「私の答えは変わらないよ。ダービーには出ない——まだ調整期間が必要なんだ。」

「……分かった。」

この目下の悩み——

そう、タキオンの求める速さの過程であるクラシック路線を彼女自らが捨てると言ったのだ。

不可思議であった。タキオンのことを恐らく2番目くらいにはよく知ると自負しているが彼女の良い所でもあり悪い所でもある「目標を求めるならばなるべく合理的に動く」のだ。速さの追求にはクラシックへと身を投じて体験する必要があるということ。俺は最初のタキオンから聞いたし、なんなら今年の正月にも言っていた。弥生賞を負

けた時点ではまだクラシック路線を諦めた様子はなかったし、皐月賞を負けてしまった時のダービ出走の保険として今回の京都新聞杯を出ることも決めていた。

だが、今のタキオンは京都新聞杯を走って終わりという意図が読めないレース選びだ。少なくとも記録を伸ばしている数日間を考え続けていたが俺には思いつかなかった。

だが、先ほどのあの言葉——『調整期間』という言葉を踏まえると、何を見据えているのか自然と候補が浮かび上がった。タキオン、あいつは……菊花賞、もしくは、シニア級のウマ娘が走る天皇賞、エリザベス女王杯、ジャパンカップ J C……あの辺りの注目度の高いGIを狙っているのではなからうか。

確かに現実的ではないがこの伸びを維持し続けられればシニア級にも立ち回れる能力が身に付いている計算になる。入着はおろか優勝だつて夢じゃない程に。

——だが、その前にタキオンの限界が訪れる。確実に、だ。

先の話ばかりしていても意味がない。京都新聞杯にはウイニングチケットが出走するらしい。彼女は実力者でありピワハヤヒデ、ナリタタイシン、そしてタキオンを差し置いてダービーを制したウマ娘であったのだ。一度泥の味を味わされた相手であり油断して勝てる相手じゃないことは分かっている。

クラシック路線を走る上で警戒を寄せていたBNWについて調べた資料はあまり役に立たないこととなってしまうが、これが彼女らと戦う最後のレースじゃない。存分に使うことにしよう。

おおよそ168時間——このレースの女神がどちらに微笑むかというのが分かるまでの時間だ。

世界線30315f3133

今日も喧噪が止まないいつもの場所に来ている。子供から大人、果てには老人までもを魅了するトウインクル・シリーズの主役達の陰には多くの“敗者達”が存在している。レースでは入着しても結局もてはやされるのは優勝した主役だけなのだ。

私もまたそれに魅了されたしがないレースファン。名前や経歴などはどうでもいいだろう。ただ、今年で42歳になるがまだまだ色々やれると思う。

「今日勝つのはウイニングチケットだろー!」

「いいや!前回と違ってアグネスタキオンだね!」

早速だが、パドックでのお披露目前では通例の如く優勝予想が繰り広げられる。そうだ。優勝予想だ。この時点で誰も2着以下の子たちを考えてはいない。優勝するものと、消去法で勝ちそうなウマ娘が決定しているだけのことだ。この話している若者たちにとつては。

(ウイ ニング チケット …… Biwa Hayahide
 Narita Taishin Winnig Ticket——この3人の頭
 文字を取ってBNWと言われており、今年のクラシック級でも特に期待されている3

人組の一人だ。）

彼女は間違いない主役だ。……だが、もう一人主役がいる。

アグネスタキオン……私の見立てでは彼女は敗者ではない。むしろこの先を賑わせる存在だと感じていたのだ。だが、クラッシュクからはまだ1戦とはいえ弥生賞を入着。その結果皐月賞は逃してしまったのだ。

（京都新聞杯に出るということはダービーにも出る。ということ……彼女はめぐり合わせが悪いように思えるから、運のいいウマ娘が勝つと言われているダービーでは果たして上手くいくのか……）

とか妄想しているうちにパドックでの紹介が始まった。

ウイニングチケット……皐月賞では惜しくも4位だったのだがダービーでは負けていられないと、ここをステツプレースに選んだのだろう。

（最初の一人だとしてもわかる……勝ちそうだ。）

特にあのトモ……素晴らしい……他のウマ娘達もよい仕上がりだがやはりBNW3人の肉体は良くどこまで育てたと言わんばかりの肉体を持っている。

（特にナリタタイシン……小柄なあの身体からあれ程のパワーを出そうとするには過酷なトレーニングが必要だろう……そしてそれを乗り越えたからこそその根性がある。）

まだまだ他にも光りそうな子たちはいるが、クラッシュクはBNW3強か——なん

て決めつけるその刹那、問題は起こった。

『4番人気、アグネスタキオン。』

「——なんだ……あれは……」

件のアグネスタキオンが登場した瞬間会場の雰囲気が一変した。ここにいる大半はアグネスタキオンの異変に気付いていないだろうが、知識があるものは理解していることだろう。

(勝つ——アグネスタキオンが勝ってしまう。)

黒いストッキングを着用することでトモの観察をされ辛くしているが、明らかに光っている。いや、これは彼女のトレーナーのように物理的ではなく、あくまでもイメージ上であるものの。思わずして目を細めてしまうような美しい脚である。

このどよめきの発生源は恐らくは自分と同じような者たちやクラシック三冠を指す上での強敵であるウイニングチケットの偵察に来たトレーナーだろう。

再度繰り返すが“私たち”は揃ってこう思っているはずだ。

『アグネスタキオンが勝つ』——と。

~~~~~

side トレーナー

アグネスタキオンとはこんな水準だったのか——!?

なんて、他の人たちは考えているのだろう。

『さあ最終直線！未だアグネスタキオンとの差は5バ身！』

（ウイニングチケットは差せない。あの差は十分な安全圏だとタキオンに教えている。）  
『後方から一気に追い上げるウイニングチケット！しかし届かないか……!?アグネスタキオンには並べないか!?』

——そうだ。タキオンの水準はクラシック級では推し測れない。

『もうゴールは目前！だがウイニングチケットは影すら踏めない!!今ゴールを越えた!!アグネスタキオン完勝!!アグネスタキオンが2バ身差で勝ちました!』

レース終了後、いつも通りライブをした後俺たちはトレセン学園への帰路についている。ライブではGIを勝ったときに置いておいてくれないかと頼まれていたのでオタ芸はせずにサイリウムを振るだけにした。

暫く寝るとだけ言って後部座席で横になっているタキオンをミラー越しに確認しつつ信号が青になりアクセルペダルを踏み込む。今、俺の頭の中にあるものはある一つの考えだけであった。

——それは菊花賞に出ないという選択肢だった。

## 世界線30315f3134

トレセン学園の購買は2種類ある。一つはウマ娘が使用する目的で、パンや果物などの食品が売られていたり、学生服の補修できるボタンや糸、教科書やノートなどの文房具なども売ってある。もう一つはトレーナーなどの職員用の購買である。飲料や食事などを始めトレーニングなどで使用する器具などもここで注文をするのだ。

そしてここには各社の新聞も売ってある。今日の見出しは昨日行われたダービーであり、ウイニングチケットの名前がデカデカと印字されていた。

(……ウマ娘のレースってのはぶつかかる機会が少ない。そもそも4戦以下で引退する子もいる上に、シンボリルドルフだってURAFファイナルズを除けば16戦しか走っていない筈だ。)

疲れない身体でどれだけレースに出れたってトウインクルシリーズの3年で走れる回数は70にも満たないだろう。たかだか十何戦程度の世界で、一度の勝利とは非常に価値が高いものとなっている。

(ダービーだけにすりやいいものの……なんでタキオンの話題を出すのかねえ……)

確かにタキオンはあの3人と走っても勝てると思う。しかしそれはあの3人のト

レーナーもそうであり、自分のウマ娘を走る前から負けるなどと思わない。先ほども言った通り一つのレースの価値が高いのだ。だからこそダービーで接戦だったウイニングチケットに2バ身差を開けて逃げ切ったタキオンが強いのではないか。という推測もされるのもわかる。だがダービーというウマ娘の夢と言っても過言ではないレースを取り上げるのであれば諸手を挙げて讃えるだけでは駄目なのだろうか。

そんなことを考えつつ俺はトレーナー室へと急ぐのだった。

~~~~~

あと1ヶ月経てば夏合宿が始まる。そこでは約2か月間通常的环境とは異なる場所でトレーニングを積むことで大幅な基礎能力の上昇が望めるのだ。実際に合宿後に記録を計るとかなり伸びており、合宿というものが成長を促すものと理解すると共にライバル達も強力になってくるというのを菊花賞で実感したこともあった。

ああそうだ、菊花賞だ。

タキオンの求めるものなんかじゃあない、可能性の先になんかたどり着けない道筋ルートを選んでしまうのだ。己のエゴで強制させるということは良い事なのかと考えてしまう。

実際に俺はタキオンを変えてしまっている。得意な脚質は先行であった筈だが京都新聞杯では逃げ切った。それも逃げウマだと言われれば納得できるほどの練度であった。

「タキオン……今後についてなんだが……」

「夏合宿の予定かい？ スカーレット君が来られないからいつものようにはいかないが……」

「いや、それについては問題ない。ただ……」

「——出走するレースについて、かな。」

「……！」

俺が言い淀んでいるとタキオンが心を読んだようにピシヤリと言い当てられてしまう。動揺する様子を見せない為に何とか言葉を繋ぐ。

「……ああ。クラツシツク——つまるところ残されたレースである菊花賞を目指している。だが……凄く、言い……難いんだが……」

——菊花賞を諦めないか。

何とか——何とか言葉を伝えることが出来た。俺の提案は棄却されるものだと考えていた。だが最善の未来を選択するにはこれしかなかったのだ。

(できる限り安全マージンを取り怪我を防ぐのが俺の目的だ。)

俺の想定ではタキオンの脚が問題なく耐え走れる距離は……1年後のURAFアイナルズ開催程度の時期では凡そ2700m程度であると考えている。最もそれは一人

で走るのであれば最長のG1レースである3200mは走り切れる筈だがかなり大事を取っての2700までと考えている。

(BNW……それに長距離ではマンハッタンカフェも警戒の対象だ。)

タキオンのライバル的存在……なのかはわからないが、クラッシュクシニアと同じ時期を走り抜いたウマ娘だ。ちなみにタキオンはどちらかと言えば中距離で先行が得意であり彼女は長距離で差しを得意としている。更にお互いに紅茶と珈琲の好き嫌いも反対なのだ。何か運命めいたものを感じなくもないが、間違いなく長距離は彼女が大きな敵として立ちはだかるだろう。

「ふうん……菊花賞を……ね。」

含みを持った言葉であった。……理解はできないだろう。自身の怪我の予防の為に夢を諦めろというのだから……

「菊花賞の代わりに『天皇賞』を出ようと思う。その為にステップレースである『オールカマー』を勝たねばならないが……これはあくまで提案だ。タキオンの判断でどちらに進むか決めてくれ。」

俺の些細な、それでいて不確定やもしれない目的よりもタキオンの“夢”を優先するべきだと思う。……だが——俺はもう一度タキオンを……

「……ああ。良いだろう、天皇賞。」

顔を上げた。タキオンの目を見た。お前は可能性を追求するという夢があるのではなかったのか？お前は——

タキオンの目は酷く澄んでいた。

後悔など存在しない。自身の選択が最善だと信じてやまない——あの頃の俺に似た、愚かで、妄信的な目をしている。

しかし分からなかった。同じ目をしていた筈の俺は彼女のことから分からないのだ。

「天皇賞を出るにはオールカマーに出なければいけないんだって？」

「——……ああ、ああ。オールカマーは9月にあるレースだ。そして天皇賞はその一か月後に開催される。」

「9月か。オールカマーに向けての夏合宿のメニューはもうできているんだろう？」

「……ああ、一応。」

「うん、なら良い。夏合宿までの日程は？」

「軽めにして夏合宿の練習に耐えうるように疲労を抜いてくようにするつもりだけど……」

「ん……分かったよ。今日は休みだろうか？私はこれで失礼するよ。」

颯爽と去っていくタキオンを、俺はただ見送ることしかできなかった。
内にある疑問を抱えたまま――

世界線30315f3135

波の音

遠くからはウミネコとアブラゼミの声が聞こえる。しかし、それらよりも——強く

——熱く

——そして大きく。

このトウインクルシリーズでも有数の強者達が練習をしていた。

(成長が早い……ッ!!)

現在は7月の末。合宿からは凡そ2週間から3週間といったところだ。

たかが2週間。されど2週間。『ウマ娘、三日合わざるは刮目して見よ。』という言葉があるように彼らの成長は凄まじいものである。

例えば……あの、ビワハヤヒデ。

少し身体が大きくなった。というより脚が長くなったのか？身長は5〜6センチ大きくなっており、一步一步のストライドが更に長くなっている。より広いストライド走法はスタミナを温存しやすくなり、長い距離のレースではかなり脅威になりうると言えよう。

収穫は何も相手ばかりではない。

新人の俺では重要な点に気付かなかったタキオンを2回も担当したからこそ分かること。そんなものを見つけてしまった。

俺はタキオンの成長記録を記している。元々タキオンのモチベーションを高める為であつたそれは、今でも続けている。元は一ヶ月——早くとも“半月”の周期で記していたが今ではなんと一週間……5日……2日……と短い間隔で記録するほど成長の幅が大きくなっていった。

筈だつた。

確かにこの合宿ではタキオンの能力は確実に増えている。しかし、以前程の伸びはない。何故かと考えた。ここ3ヶ月の異常な伸びは何だつたのか？

答えは簡単だつた。

（——ダイワスカーレット……彼女とトレーニングをしていた期間だけ異常な程の伸びがある……！）

確かに、ダイワスカーレットとトレーニングをしていたタキオンのモチベーションは

かなり高かった。そう、実験で良い効果を獲れたかのような……——
(兎も角……ダイワスカーレットの穴は大きい……クソ、俺が新人じやなきや二人をチームで見れるというのに……)

トレセン学園……その親元であるURAが定めている規定で『原則一人以上のウマ娘を担当しなければ複数担当する事を禁ずる。』ということがあるのだ。それは彼女らの未来を潰してしまわぬようにする為であるのだが、今ではそれが足枷でしかないという事実に苛立つ。

(9月後半……この程度では……)

秋の天皇賞は出走したことがあるがそのステップレースであるオールカマーには出走したことはない。オールカマーがどの程度の難易度であれ天皇賞のレベルはどれほどなのかは分かっている。だが……このままでは勝つかは怪しい所だ。少なくとも現状多くのレースで見せている逃げ”モドキ”では太刀打ちできないはずだ。かと言って先行で走らせても良いが……シニアのウマ娘相手に技術が通じるのか……

思わぬ収穫であった夏合宿。後半ではどれほど伸びるかがオールカマー、引いては天皇賞を勝つ為に起因する筈だ。そう考えて、俺はタキオンとのトレーニングを励むのだった。

~~~~~

Side タキオン

夏合宿というものは実力がとても伸びる。という定説がある。

事実、9月以降の出走できるGⅠが殆どシニア級も出れるものであり、あの皇帝シンボリルドルフはシニアを相手にして勝っているのだ。まあ、規格外なのであまり参考にならないが……それでもシニア相手にクラシックが勝つというのは珍しくない。ということから、夏合宿というものはウマ娘に大きな成長を与える……筈なのだが。

自身の成長というものを私は実感することができなかった。

あの神懸ったタイムの更新劇は鳴りを潜めている——とは言っても、一般的な観点から見れば自身の成長は遙か大きいものだろう。要するに私たちはこの異常な成長速度に慣れてしまったのだ。

(彼もどうしてあんなにも更新が起こった原因が何なのかを判ったはずだ。……あとは……彼の纏めた資料を活用すれば……!)

唐突だが。

アグネスタキオンには目標が増えていた。

元来ある目標はウマ娘というものの可能性——特に速さの点でどこまで行けるかというものである。しかし、もう一つ目標——と言えるほど彼女の中では確かなものにはなっていないのだが、そうありたいというものが出来た。それは……

——怪我をしない身体というもの。

きつかけはあのノートを見た時であった。自身のトレーナーが集めていた一応という範囲を超えた代物。その中にはタキオンの興味を引いたものもあった。それが身体を丈夫にするというだけの研究の論文であるのだが、その一文には彼女自身では考えつかないようなアイデアが隠されていた。たった2ページに綴られていただけの研究がタキオンの閃きによりあと数歩で「永続的に身体を丈夫にする薬」というかのトレーナーが求めてやまないものが出来上がるうとしている。

何故、タキオンがここまで熱意を持ってこんなものを研究しているのかと言えば、彼女自身には解らなかつた。

ただどんな人体実験も嫌な顔をせずに随う意思を見せるトレーナーが自分の怪我で精神的なトラウマを掘り起こすのは……なんだか考えただけでもモヤつとするから——こんな曖昧で簡単な理由だけで、生きる為に必要な食事をする時間すらも無駄だと言いつ捨てる自分がわざわざ速さを研究する時間を割いているという状況が理解できないのだ。

それからして夏合宿でのメニューに少々変更が加わった。この合宿でのトレーニングで得られる効果が私がいつもやっているトレーニングと同程度の効果しか望めない

からだ。

(それにしても1週間の休みとはねえ……)

変えられたメニューの内容は身体能力を落とさない程度の軽いトレーニングだけをし、その後は適当に遊んで良いというものであった。そんなことをして天皇賞を勝てるのかと聞いたら、どうやらトレーナー君は敵情視察に行くらしい。この休みはその為の一週間であるというのだ。

(実力を隠すことで勝率を少しでも上げる為とも言っていたが……ステップレースに出るのだからあまり意味が無いと思うがね……)

だがまあ、休みは休みだ。存分に使わせてもらおう。

最近滞っていた薬の研究を進める為に、タキオンは頭の中で理論を組み立てていくのであった。

## 世界線30315f3136

俺とはあるトレーナーに意見を通しにゆく途中であった。意見とはずばりダイワスカーレットのトレーナー——“安藤トレーナー”に練習を一緒にしないかという提案をしに行くのだ。俺だけが用意できる限界が分かってしまった為だ。勝手なのは分かるがより効率的な方法があるというのに行わないというのはなんだかもどかしい。だからこんな変な提案をしに行くのだ。

あんたのウマ娘と一緒にトレーニングしませんかってな。

いや、確かにチームではないからといって練習を同じくしないというのは無い。むしろ、強力なウマ娘であればクラッシュクシニアや引退しているというのを問わず練習を共にするというのは日常茶飯事だ。

だが、その内容はあくまで並走程度のもの。チームトレーニングとはこれから目の見ることになり様々な開拓がされていくだろう。

(もつとだ……ああクソッ……考えれば考えるほどチームが欲しい……)

以前、タキオンの骨折した原因は限界以上の力を出したが為で……幸か不幸かそれはスピードの限界の先であった。ならば本気を出さずとも勝てるのであれば骨折などは

起こらないのではないだろうか。という仮説の元にタキオンのトレーニングを考えている。

（最高速度が上がり、スタミナが大幅に上がったことでかなり長い距離でもスパートのタイミングが早めれることができるようになった……だが……）

足りないのだ。

俺は一応の目標として来年の——URAファイナルズ前の有馬記念を勝ちたいと思っている。

シンボリルドルフは今走れるウマ娘の中でも、そして日本のウマ娘……いや、世界中のウマ娘と比べてもトップクラスの速さである筈だ。要するに”皇帝”に勝つということは、速さの先に至れるということと同義なのではないかと思っている。実際あの有馬記念のスパートの速度はタキオンの限界値を超えた速度であった。詳しく計った訳では無いが、スパートをかける皇帝を後ろから差し切るといのは並のスピードではない。

最も——アイツはその代償で走れなくなってしまったが。

楽勝で勝てるのであれば限界よりも力を出さないのが怪我をしない。だからこそ怪我をしないんだ。（小泉構文）



「○○トレーナー、話とはなんですか？」

この優男風のトレーナーは安藤トレーナーだ。確か、GIレースを2勝も挙げたウマ娘を何人も育てたこともある確かな実力を持ったトレーナーだ。

「今日は貴方に提案——……私はお願いに来たんです。」

「“お願い”……とは？」

「貴方の担当しているウマ娘、ダイワスカーレットと私のタキオンと練習をご一緒させて頂きたいんです。」

「……練習……クラシックも後半になろうというアグネスタキオンがデビューしたてであるスカーレットと……ですか？」

「貴方がチームを持つているトレーナーであることは重々承知しています。ですが何とかタキオンと練習をさせて頂けないでしょうか。」

「チームと言いましても今年でスカーレット一人になりますが……どうしてダイワスカーレットなのですか？」

彼の担当するウマ娘には短距離マイルのGIを合わせて4勝したウマ娘がいる。その子を目当てとするのならば納得できるが、タキオンの世代はレベルの高い強豪ばかりなのだ。いざとなれば彼女らに模擬レースなどを頼み込み実戦を積ませることで更に能

力や技術を学ぶことができるのだが、如何に輝きを見せる宝石であろうとダイワスカーレットはまだ研磨前の原石なのだ。技も学べぬ上に実力も及ばないだろう。

以上の理由からこのトレーナーは温情で新人の俺を止める為にダイワスカーレットである理由を教えろと言っているのだ。

「安藤トレーナーはチームを持ったことがありませんよ。……ならば、わかる筈です。私はタキオンを強くしたい。……その為に私がどんな目に会おうとも……」

知っている。傍から見ればトレーナー歴1年の若造程度がチームでの練習の効力というものを。

「お願いします。」

知っている。時にはプライドを捨てなければいけないことを。

過去の功績も、栄誉も、誇りも、全て棄て去れ。

必要なのはタキオンを救うという心とそれを叶えられる知識だけでいい。

これこそが——タキオンを救う道である。

~~~~~

side 安堵トレーナー

つい4ヶ月ほど前……新たな担当であるダイワスカーレットを受け持つこととなつ

た。

そのスカーレットから話を聞いた。一人のウマ娘と、一人のトレーナーについてだった。

ウマ娘——アグネスタキオンはただの先輩後輩ではなくデビュー前に同じく練習を共にした仲だと言う。1年という差があるが、自分はアグネスタキオンに追いつけるのか分らない。と

トレーナー——名は○○といい、アグネスタキオンと一緒にトレーニングをすることを提案してきた当人である。……そして、スカーレットから聞いた話によると随分な曲者らしい。

そんな彼に呼び出された。一体何なのかと思えばスカーレットと練習させてほしいというものだった。

この提案を受けた時、彼が理想主義者だということを思い出した。

スカーレットの話は大方、アグネスタキオンからの相談の話である。内容は○○トレーナーが抱えるトラウマについてだった。

それにしても、であった。

ウマ娘の怪我を防ぐ為に強くするとはどういうことなのかと困惑した。彼はどうやら限界以上の力を出さなければ怪我は発生しないと考えているらしい。トレーナーに

なつて100年余りであるがそんな理論はバカげているとしか思えない。現在最強のウマ娘とされている「シンボリルドルフ」でさえも怪我をしない程度に力をセーブして勝つというのは無理な話だ。過去の名バでも無理だろう。

そして私自身の体験もあつた。実のところ、怪我による引退を余儀なくされたウマ娘を受け持ったことは多々あつた。その子の人生を終わらせてしまつたと思うし、申し訳なく思う。しかしそれは予期せぬものもあつた。例えば、軽いトレーニングとして走らせると、ターフに会つた僅かなくぼみに足を取られ骨折したこともあつた。

ウマ娘の怪我とはいつ来るかわからない。そういう風に捉えていた。

だが彼は必ず来るものと考え、そしてこんなバカげた理論で怪我を防ごうとしていく。

『貴方のウマ娘と一緒にトレーニングさせてください。』

普通ならば一蹴していた願いであつた。デビューが一年ズレているとはいへ、シニアで相まみえることが無いとは言ひ切れない。同じくして練習するのであれば手の内をバラすということと同義だ。どのようなコース、どのようなバ場、どのような戦略が得意か——これらを知られるということは即ち敗北を意味する。この提案は自身の喉元を噛みつかせるような行為である。

だが……それ以上に彼の考えるトレーニングが気になった。

強くさせることで怪我を防ぐというバカな考えを實現できる程度には彼のトレーニングは効率を極めている。実際、スカーレットが練習を共にしていた時に勧められたというトレーニング、そしてモチベーションアップや今後の練習で役立つだろうと計測されたスカーレット自身の1600〜2000mのタイムの推移を見ると、たかが3カ月でかなりのタイムを伸ばすことが出来ている。2人という人数だがチームトレーニングの難しさを知る身からしてはここまで伸ばせるのは偶然ではないと思っている。少なくとも1年目の新人トレーナーには無理だろう。

そういった点からもしかすれば、彼のノウハウを得ることができるかもしれないと考えた。彼にスカーレットの弱点を晒すリスクよりも彼の考える効率的なトレーニングの方法を知れるのならバリターンは計り知れない。

彼に答えた回答はスカーレットに相談してから答えるというものだったが、彼女は拒まないだろう。

そういえば、彼は理想主義者だと聞いていたが……彼は強迫観念を抱えている。と
いった方が正しいのかもしれない。

世界線30315f3137

『オールカマー完勝！そして天皇賞か——』

そんな見出しで煽っているこのゴシップ誌だが、中身は全くと言っていいほどない。オールカマーが天皇賞へのステップレースということとは今の時代調べればすぐわかる上に肝心の中身も『シニアへの殴り込みはどうなるのか。』なんて一文で済ませられるのを長々と書き出してただけだ。

トレセン学園は殆ど関係者以外立ち入り禁止だ。これは中央でも地方でも同じであり、悪意ある者から未熟なウマ娘達を保護する為でもあるのだ。とは言っても地方ですら一面独占、場合によっては三面までもという風に大人気のレースなので普通の中学生、高校生からすれば遙かに慣れていると言うべきなのだろう。

タキオンもこういうものは好きではないらしい。まあ、俺も正直嫌いだ。

(あー……どうしようか……)

そんな気にしなければ済むような些細なことよりもっと大事な事がある。そう、ダイワスカーレットとの練習のことである。

以前の練習はトレーナー契約を少し待って貰って3ヶ月という期限があったので効

率的な練習を考えるほどの猶予は無かったのだが、今回は前回を踏まえてすぐに考えなければいけない。幸いにも二人の得意な練習は似通っており、タキオンとダイワスカーレットが最も伸びを見せる練習では無いにせよかなりの伸びは期待できるのだ。
 (走り込みと坂路……たまたまプールトレーニングを入れて……座学は……)

〈 s i d e o t h e r 〉

「エルの世界最強への第一歩デース!!!」

「エルちゃん凄かったもんね〜」

先日はエルコンドルパサーのデビュー戦……特に苦戦することも無く3バ身離しての楽勝であった。その為かエルコンドルパサーの気分はかつてないほど上がり、結果悪癖でもある調子に乗りやすいというものが発揮されていた。

例えば……無駄にパフォーマンスをしたりとか。

「今日のエルは絶好調!!!怪鳥、優勝、絶好調〜〜!!!」ブンブン

「エル〜?危ないから——」「大丈夫デース!」

「あつ、そうだ！グラスに絶好調なエルのダブルリアットを見せてあげるデース！！！！」

——不運にも

不運にもだが、エルコンドルパサーは興奮しすぎた。

その結果——

「リギーー?!?!」ドゴオ!!!

角から出てきた人物にリアットが直撃することとなった。絶好調で放たれたそれは親友でありライバルのグラスワンダーにMAXのパフォーマンスを見せようと腰を捻り加速、続けて肩、腕、拳と加速させていた上に回転の力も加わっていた美しいものだった。

事実、それをまともに喰らった人物は真後ろへ吹っ飛ばされて壁に激突。ぐったりと項垂れている。

グラスワンダーがそれに近付こうとすると……

「君達は……『怪鳥』エルコンドルパサーと『栗毛の怪物』グラスワンダーか……」
項垂れた男が呟いた。

「ふふ……どうも最近”ツキ”が回って来なくてね……今年に入って既に9ヶ月は経っているが、やっと”運命”にしがみつくと事ができたと思うよ。」

怒るでもなく、苦しくでもなく——独白。

エルコンドルパサーたちは困惑した。『コレは何なんだ?!』と思つたに違いない。誰が殴り飛ばした相手に自分語りを披露されることを予測するのだろうか。

「一つ”質問”してもいいかな——?」

(な、なんデスかこの得体の知れない薄気味悪さは……)

「確か……君たち二人はライバル関係だと聞いているが……実際に相まみえた時はお互いをどう思う?」

——怖い。

グラスとはまた違った怖さを持つこの男に恐れをなして動けずにいると、なんとグラスがこの問いに答えた。

「決して油断できない——打倒すべき”敵”です。」

「敵——か……フフフ……」

ゆつくりと、ゆつくりと地に手を付き立ち上がり、幽鬼のような足取りで襲い掛かる——のではなく、男はありがとうと言ってそのままスタスタと歩き去っていった。

「……な、なんだったんデスか……」

「……わかりませんね……」

単純な恐怖だけでなく、得体の知れないと恐怖というものを覚えたエルコンドルパサーであつた。

↳ side ○○トレーナー↳

笑いが止まらない。

探し求めていたのは随分と簡単に見つかったのだ。

(「こんなにも早く……こんなにも簡単に……!」)

これはタキオンを救う為に極めて重要な手になる。俺の推測はこれで完成することだろう。

「クク……フフフ……」

この日男の渾名に『薬物硬め多め濃いめ』というものが追加されたのだが、この男は知ることは無い。

世界線30315f3138

今、タキオンをターフへと送り出そうとしている中で怒号とも呼べる大歓声が上がら叩き付けてくる。俺……いや俺たちが送り出した先は京都の地ではなく東京。

そう、秋の天皇賞である。

つい先日行われた菊花賞はあの“マンハツタンカフェ”が勝利したと聞き、改めて彼女のステイヤーとしての才能の高さを感じると共に……タキオンは練習を積んだ。

10月からは俺の考案したトレーニング方法……とは言いつつも彼女らのモチベーションを上げたに過ぎないのだが、それらをこなす内にタキオンはオールカマーの時よりも更にグンと伸びることになる。

(闘志……ウマ娘としての「本能」を刺激するのは最も効果を発揮するという推測は合っていた。)

相手を越えたいという思いがウマ娘の本能であるのなら、もつとそれを“増幅”する事によって身体の成長が促されるという仮説を立てた。俺の理論は名づけるとするならば第三次成長と言ったところだろうか。

適切なトレーニングを行い、適度な栄養を取らせ、ストレスは最低限に、しかし本能

を常に刺激させてやる。

まだまだ改善点はあるにせよ、ここまでの事ができればどんなウマ娘だってG1……いや、3冠だって目指せる範囲には育てられるはずだ。

『各ウマ娘ゲートに入りました。』

〔挑戦だタキオン——お前は“挑戦”するんだ……〕

上には皇帝……下には輝かしい功績のウマ娘達が……そんな彼女らに板挟みにされて忘れ去られてしまうようなものではない。アグネスタキオン——又の名を“超光速のプリンセス”という名を残さねばならない。

その為に俺は助けるのだ。

『各ウマ娘——スタートしました！』

（……………）

ただ……まあ……

（……………、すごい見にくいなあ……）

ターフとの海拔差はほぼない為中団の混戦具合では視認しづらい。どこに警戒するべきウマ娘がいるのか分からないし、反省点も見つけにくい。だが……

『——アグネスタキオン序盤から大逃げッ！』

ハナを突つ切るタキオンを見るぶんには関係のないことだ。

そう、ダイワスカーレットとの練習でもう一つ副産物が生まれたのだ。元々先行、次に差しを得意とするタキオンだが、何故か逃げをも得意とするようになっていた。一つ考えられる要因はやはりダイワスカーレットの存在であるが詳しいことは分からない。ただ、『ダイワスカーレット』と『練習』することで何かしらを学んだのだろうかという説が個人的には推している。

「“ダイワスカーレット”なら逃げ……では追い込みの適性を持つている”ゴールドシップ”や”ナリタタイシン”などであれば……？」

非常に興味深い題ではあるが残念ながらそれを調べれる暇はない。そして逃げという作戦はかなり好都合でもある。なぜならば相手とのレベル差が顕著に表れるからだ。サイレンススズカの逃げなんかは分かりやすい例だろう。中距離……特にマイルでは相手とのスピードの差がハッキリと表れているのだ。サイレンススズカをどうして引き合いに出したのかといえば彼女は走り切るどころかしっかりと最終直線で加速するということ。単純なスピードだけでなく、総合的に見てもポテンシャルは高い——俺の考えうるタキオンの最終地点はそこだと思っっている。

だがあれほどの逃げをしるということではなく、ただ逃げるだけでいい。タキオンの

力はもう既に普遍的なウマ娘では追い付かなくなってきたきているのだ。警戒するべき相手がいないのであればただただ自分を追求するだけで勝てるだろう。……ただし、最高の逃げを常に打てるならば。だが。

所で、どうしてクラシックとシニアが分かれているかその理由を知っているだろうか。勿論、クラシック級の彼女らは成長——専門用語で言う『本格化』が始まっていかなかったりする為である。その為上半期の重賞の殆どは大抵クラシック級とシニア級とに分かれており本格化が過ぎたウマ娘が多くなるクラシック下半期はシニアと走ることになる重賞が増えてくるのだ。だがしかし、それでもクラシックでシニアに挑むのは厳しいものとされる。

もうお分かりだろう。厳しいとするもう一つの理由は場数の差である。それによつてレース運びの技術が段違いなのだ。クラシックでもプレッシャーを与えようとするウマ娘はいるが、ラフプレーまがいの行動を除けば大半は取るに足らないものだと言言できる。だが、シニア級の相手への圧の掛け方は段違いだ。高々目障り程度だった圧がコースを制限し、移動させられスタミナを削る羽目に、冷静さを欠いて周りへの視野を狭める。実力が勝っていたとしても技術でひっくり返され負けることも多々あるのだ。

特にその駆け引きが飛び交うのが中団である。如何に実力が高くとも駆け引きの経

駿の少ないウマ娘をそこにねじ込むのは悪手。もしくはよほどの胆力を持っており全く動じないウマ娘だからなのかのどちらかになるだろう。

(楽に、負担の少なく勝たせるには「逃げ」でなければ……)

タキオンは意気揚々と先頭を走っている。本来であれば苦戦を強いられる筈だが、やはり先頭では流石のベテランでも駆け引きを仕掛けるリスクが高いようだ。

現在2バ身……くらいだろうか？ 実況から3バ身と聞こえたので目測より離れているみたいである。ちょうど1000mを通過したところなのでここからが本番だ。後ろから追ってくるウマ娘に追いつかれないように逃げ切らなければならぬ。足を溜めている訳でもなく、ただただ苦しくても逃げ続けなければいけない。

だが問題ない——2000mならばギリギリ走り切れる。様子見だったのかえらくスローペースな展開だったことも追い風だった。

最終コーナーの時点で差は4バ身。逃げれるッ！

『アグネスタキオン!!このまま逃げるか!?後ろの集団も一気に加速した!』

『残り300!アグネスタキオンの影は誰も踏んでいない!』

『200mを切つてまだ縮まらない!アグネスタキオン余力があつた!このままゴールか!?後続も追いつがる——』

「行けえっ!」

『アグネスタキオン一着でゴールイン!!初のG1勝利です!!2着との着差は2バ身!』
「よし!!!」

ガッツポーズを取っていると後ろから視線を感じたため、振り返るとたづなさんがいた。少し恥ずかしいと思いつながら咳き込んで挨拶をする。たづなさんからおめでとうございますと祝言を頂いた。これで二回目だろうか、クラシックの3つのレースは結局何も走れなかったしな……

「もしよければ天皇賞へ進んだ理由を教えてくださいませんか?」

「理由……ですか。」

少し沈黙を置いて、どつちを答えようかと考える。しばし考えた結果たづなさんであれば大丈夫だろうと本当のことを話すことにした。

「実を言えば……タキオンの足を考えてのことなのです。」

「足……ですか?」

えらく妙な顔をして聞き返すたづなさんであるが、やはり秘書としてそういう生徒を多く見てきたのであろう。当然、歯がゆい思いだつてした筈だ。

「……変なのかもしれません。ただの臆病なのかもしれません。——ですが、私は長距離を走ることによってタキオンの足が故障してしまうのではないかと考えてしまうのです。」

俺にベツトリと貼り付いた”恐怖”は俺だけでなく、タキオンまでも雁字搦めに縛っているのかもしれない。だが、それでタキオンが怪我をしないのであれば御の字である。走れるならば、未来はまだ潰えていないのだから……

たづなさんは何か言いたげな顔をしていたが、結局何も言うことは無かった。タキオンが帰ってきたのでたづなさんとは一旦別れを告げて、楽屋へと共に向かう。

「そうだタキオン。勝った記念ということで何か料理をリクエストしていいぞ。」

「……………」

「タキオン?」

何故か面食らった顔をしたままのタキオンだが、やがて大笑いしだした。

「——何かと思えば料理!ふふ……そうか、料理か……」

「悪かったな……ああ、でも燕の巣みたいなさういのはクオリティが滅茶苦茶低くなるからな?」

「流石の私もああいうのは頼まないし好まないよ。……そうだ、とびきり美味しい人参ハンバーグでも作ってくれないか?」

「分かった。人参ハンバーグだな。」

ある程度作れる範囲のもので良かった。まあ、色々なことへの労いも込めて作ります

か
⋮
⋮
⋮
!

世界線30315f3139

秋の天皇賞も終わり、残すGIも10を切った。タキオンは来年の大阪杯に向けて、ダイワスカーレットはチューリップ賞に向けて共に練習をしていた。ダイワスカーレットとの実戦形式の練習の距離は2000mとしている。これはタキオンの大阪杯、ダイワスカーレットの目指すトリプルティアアラの3冠目である秋華賞の距離である。ダイワスカーレットが先行してタキオンがそれを追う。いつもは残り200m付近で追い越す——しかし事件は起こった。

(あと3秒……いや、あと2秒……——ツツツ!?)

タキオンが追いついた。そしてそのまま抜き去るかと思えばダイワスカーレットの急激な加速——なんと抜かれることなくそのまま付かず離れずの半バ身を維持してゴールしたのであった。もうシニア級にもなろうタキオンのペースはデビュー数ヶ月のダイワスカーレットにはまだまだ厳しく今までは抜かされるばかりであった。だがしかし逃げ切っている。

(最後の加速は一体……?)

あの加速はなんなんだ?最後の気力を振り絞ったのか……それとも急激な成長が来

たのか……？いや、前回の実戦形式の時はゴールし終えた後は歩くことすらままならないほどバテバテだったのだ。それからたったの数日で逃げ切るスタミナが付かないことくらいは担当していなくても分かる。

謎を残したまま練習を終える。

——この時、俺はまだこの現象がただのまぐれであると考えていた。

ターフを駆ける二つの影。競り合い、抜きつ抜かれつの大接戦——これがメイクデビュー2か月のウマ娘とクラシック後半期のウマ娘であると知ったなら驚かれるだろう。俺もこの光景をついこの前までは夢か何かだと思っていた。

しかし現実。ダイワスカレットの終盤の加速にタキオンは追いつけないでいる。そのまま半ば身差でゴールした。実にこれで4回目の出来事である。

あの加速はなんなのか、ダイワスカレットの急成長……と調べたいことに欠かさないが、あの加速を突破することを考えなければいけないのだ。彼女の走り方が変わったのではなくただ回転が速くなっているだけなのだ。足の回転を速くする走法をピッチ走法と言うが回転数が上がる⇨歩数が増えるということである。無論歩数が増えるとその分運動量が増える為使うスタミナは増えるというデメリットがある。

だが、ピッチ走法になっただけではなく、ダイワスカーレットのスパートの特異性といえはその一步の広さにある。ピッチの回転数をそのままに非常に大きなストライドを保っているのだ。言うなれば電子回路の小型化のような革新を彼女はやってのけているのだ。

当然、タキオンでも試してみたが足への負担が尋常ではないのですぐにやめさせた。

・終盤の驚異的な加速

・能力の急成長

・異様な走法

これらはタキオンに生かせるかもしれない。

もしあの加速をタキオンに取り入れることができるならば……あるいは——！

◆◇世界線30305fceb1◆◇

side ダイワスカーレット

タキオンさんが海外に行って早一週間が経った。彼はいつもターフで走るウマ娘を眺めては帰るといふ生活を繰り返している。

タキオンさんが旅立ったのは2月の後半、現在は3月の一週目の週末である。

(声……掛けられるような状態じゃ無いわよね……)

タキオンさんからは少しいいから彼が立ち直れるように手助けをやってくれないか——と頼まれた。だからこそアシとカフェさんとシャカールさんの3人はそことなく彼の様子を見ているのだが、端的に言えば彼は別人のように変わってしまった。

彼に話し掛けた時は何でも無いように見せようとしているのが分かるくらいに端々から元気がないのを感じ取れる。トレーナーであるからいずれは他のウマ娘も担当しなければいけないが……今の彼の様子では無理だろう。

ダイワスカーレットは何も思いつかないまま流れ行く日々にもどかしさを感じながら過ごしていた。

若し、ダイワスカーレットがここで行動を起こしていたならば未来は違ったのかもしれない。

そうして数日後

アグネスタキオンのトレーナーがいなくなったことを知った。

~~~~~

side マンハッタンカフェ

—— “友達” が消えた。

マンハッタンカフェは過去にない異常を感じ取っていた。いつ何処でも一緒にいた“友達”が急に消えてしまったのである。これはおかしいと思い、“友達”の様子を見てほしいと頼んでいた対象であるアグネスタキオンのトレーナーに何かがあつたのだと急いでいた。

(家じゃなくてトレーナー寮だつてタキオンさんは言つてたから……部屋は誰かに聞いてみよう。)

ウマ娘寮からトレーナー寮まではヒトの足でもほんの数分足らずで到着する場所にある。マンハッタンカフェは確か2階ということ覚えていたので駆け上がる様に登っていく。

(……上島、○○、木戸……タキオンさんのトレーナーさんはここ……?)

?

刹那感じた……この感覚……

マンハッタンカフェはこの世のものでない異常を感じると冷や汗が止まらなくなってしまう。やがて制服の襟元に脂汗が流れ落ちるほど大量に汗が吹き出るようになる。

マンハッタンカフェが思考を再開することができたのは階段を登ってきた女性のトレーナーに声を掛けられてからであった。

(……………?)

マンハッタンカフェを襲った異常は至極簡単なものである。数度であれこそ聞いたことがある人の名前を忘れるというアレであるのだ。

(お、おかしい……何かが……!)

だがただ忘却わすれている訳ではない。

扉の真ん中に書かれているモノが文字だということは理解できる。それがアグネスタキオンのトレーナーのものであるということも同様だ。

しかし、何故か名前はいつまで経ってもわからない。名前として認識できないのだ。



確かにそこに書かれているのに覚えられないし、分からない。

(文字だつてわかる。なのに……どうして……?)

文字が読めないのではない。ど忘れした訳でもない。ただ認識できないことに戸惑っている。たかだか二文字程度であろう名前が記憶にも言葉にもできない。

「あの……大丈夫ですか?」

「——ッ!」

女性トレーナーに覗き込まれ表札が視界から消えると、やっと冷静さを取り戻せた。ある程度落ち着いたと感じると夜の帳のような短髪のリレーナーにここは誰の部屋なのかと聞いてみた。

女性のトレーナーは初めは疑問に埋め尽くされた顔をしてやがて瞳孔が開き、呼吸が速くなり、頭を抱え始めた。明らかに異常を見せた彼女にアグネスタキオンのトレーナーの部屋かと聞くとただひたすらに下を向いたまま顔を上下に振っていた。

(お、異常しすぎる……)

ここは『アグネスタキオンのトレーナー』の部屋なのは間違いない。この事象が何なのか探すべくドアノブをひめるも開かない。鍵が掛かった状態であり、この部屋に入ることは叶わなかった。

この女性のトレーナーは桐生院葵というらしく、タキオンさんのトレーナーとは面識

があつたようだ。とりあえずこの部屋に入るには鍵が必要でありマスターキーや合鍵は警備の関係上トレセン学園の職員室で管理されているという。桐生院トレーナーは鍵を取りに行くと言い、トレセン学園へと向かった。私も手持無沙汰なのでついでにこの寮の人から情報を集めることにした。

しかし……

(……誰も”あの人”の名前を覚えていなかったし、隣人でさえも姿や会話すら覚えていなかった。……明らかに異常すぎる……)

スカーレットさんと昨日話した時の会話の話題に上がったし、シャカールさんとは先日話し合った。

(あれ……？私とスカーレットさんはどうやって”あの人”を呼んだんだろう？……思いつかない……)

確かに記憶では名前を呼んだ覚えはあるのだが一体どう呼んだのかが抜け落ちている。……そうだ。タキオンさんなら何か覚えていてもおかしくはない。今まで実験やら何やらを仕掛けてきたがこんな趣味の悪いことはしない筈だ。

早速携帯を使って彼女に電話を掛ける——1コール、2コール……そうする内に「もしもし」と聞き慣れた声が聞こえてきた。

『誰かと思えばカフェじゃないか。珍しい、どうしたのかな？』

「タキオンさん……貴女のトレーナーさんを覚えていますか……?」

『……何を——いや……カフエ……まさかトレーナー君は……?』

「名前を言ってみてください。」あの人の「名前」を……」

『……………』

案の定、というべきか。タキオンさんが「あの人の名前を答えることはなかった。事情を説明する内に誰かが凄い勢いで近づいてくる足音がする。階段を駆け上がったのはこの学園の理事長の秘書である駿川たずなさんであった。手には多くの鍵が収納されている所謂キーオーガナイザーを持っており、どうやらこの部屋の鍵もあるようだった。

「——鍵を持ってきました。……これは……」

彼女もまた、表札を見て困惑の表情を見せたのだった。私は通話をテレビ通話にしカメラをドアへと向けるとタキオンさんは消え入りそうな声で疑問を呈した。

『カフエ……これは……なんなんだ……? どうしてトレーナー君の名前を思い出せないんだ……?』

「わかりません……ただ、誰も覚えていないということだけしか……」

そう答えると階段をドタドタと駆け上がる音が聞こえたのでそちらへ注意を向けると、息が切れ切れの桐生院トレーナーであった。……学園まで少し距離があるし、私が

呼びに行った方が良かったのだろうか。

「……とにかく、ここを開けてみないことにはわかりません。」

たずなさんが鍵を開け、ドアを開けるとドアチェーンがあるらしく引つかかった。しかし、どこからかペンチを取り出してチェーンを切り、無理やり開けたのだった。

部屋の中は特に何も無い。少しだけ異性の匂いというものに驚きつつもたずなさんを先頭に廊下を抜ける。多少の生活感はあるものの窓は締め切られており、風呂やトイレの中にも誰もいない——まるで出かけた後のような無人の密室であった。

『冷蔵庫……カフェ、冷蔵庫の中を見てくれ。』

タキオンさんの指示に従って冷蔵庫の中を見てみると、生鮮食品は卵が1パックほど、他にあったものは味噌のような調味料といくつかのスポーツドリンクが中にあるだけだ。冷蔵庫周りも色々探してみたが、レトルト食品や即席麺はなく常温保存されている調味料や茶葉、缶コーヒーなんかもあった。

「……随分と量が少ないですね。」

『量が少ない……？カフェ、写真を送ってくれ。』

矢継ぎ早に指示が飛んできて文句を言いたいが、今はタキオンさんが何かを知っているかもしれない。私は写真を撮るとタキオンさんに送信する。

『……やはり、か。』

「やはり……?」

オウム返しに聞いてみると、タキオンさんは最悪の事態を考えた方が良さだろう。と言った。考えうる最悪の事態とは……

『たづなさん、トレーナー寮には監視カメラはあるかな? あればそれを確認してほしい。』

「……分かりました。」

たづなさんは駆け出していった。私と桐生院トレーナーには部屋をもう少し調べてみてほしいと言われ何か痕跡が無いか探してみる。こういう時、いつもならあの子が何かを見つけてくれたりするのだけど……

十分ほど部屋を組まなく探すも痕跡らしい痕跡は見られない。何かおかしい点も無かった。

「皆さん! 寮の外にある学園の監視カメラのデータが見れるそうです!」

その言葉に私達は最悪の事態ではないことを願いながら、学園の守衛室に向かうのだった。

~~~~~

「こちらが2月末から今日までの監視カメラの映像になっております。」

警備員は引退したウマ娘であったり、警備専門のウマ娘が付きやすい仕事であるとい

う。監視カメラの映像を用意してくれた人物もまた、ウマ娘であった。

『……まずは3月5日、いやそっちでは6日か。昨日の映像から順に確認しよう。』

タキオンさんの言葉に皆が賛成し、暗い夜からどんどん巻き戻されていく。18時

……17時……15時……12時……8時……3月3日……3月2日——3月1日

——ついには2月28日にまで巻き戻ったが、何もなかった。

巻き戻るにつれどんどんと異様な雰囲気になっていく。タキオンさんのトレーナーは一週間家から出ていないことが証明されたのだ。奥のドアは出入りされ、多くのヒトが門から出ていつているのに対して、“あの人”のドアは全く動きを見せないまま移され続ける廊下がひどく不気味だった。

「次が……2月27日。」

23時——真つ暗闇に蛍光灯が光っている様子。

22時——奥の部屋のトレーナーが袋を持って出ていった。

21時——奥の部屋のトレーナーが手ぶらで中に入っていく。

20時——桐生院トレーナーがドアの前を行ったり来たりウロウロしている。

19時——何もない。

18時——手前の部屋のトレーナーが入っていった。

17時——桐生院トレーナーが再び訪れた。なんとアグネスタキオンのトレー

ナーと話している。

映像は一旦止められ桐生院トレーナーへ質問が投げかけられる。一体何を話したのかというと、かなり落ち込んでいたので何か励ませないかと訪れたは良いものの出走できなかつたU R Aファイナルズにて優勝した為に励ますつもりが心無い言葉を送っただけであると思えてアタフタしただけらしい。しかし彼女の言う話では“あの人”は落ち込んでいるように見えたものの対応はいつも通りであったという。現状桐生院トレーナーが最後に“あの人”を見た人物である為この情報は大き過ぎる収穫だろう。

話を終えて再び何か手がかりはないのかと映像を戻し始める。桐生院トレーナーが話す寸前にドアを開けて周りをキョロキョロと見渡した“あの人”が映っていた。そして何か箱のようなものをドアの前へ置いてある。どうやらこの箱を受け取ったらしいが一体なんなのかはわからなかった。

「これは……」

肝心なのはその更に前、撮影された映像越しに伝わる程の霊的存在が箱を置いているように思えた。どうして「思えた」なのかは全く“みえない”からである。“お友達”を含め私はそういった“よくないもの”や“みえないもの”が見えるのだが、全くみえないにも拘らずこの存在感。もはや霊的存在ではなく——そう、神と呼ばれる存在でなければこれ程の存在感は感じない。そして全く害を与えようとしているように感じ

ないのはどうしてなのか。

「お友達に頼んでから数日以上経っている……まさか、」お友達「ごと魅入られて神隠しにでも……」

そういった空間に迷い込んだか、それとも攫われたか。いずれにせよあの箱が何かの手掛かりになるかもしれない。

そして……あの箱は普通の人に触らせてはいけない。

あの箱は恐らくだが「あの人」への恩寵、我々からすれば呪いのようなものだと考えられる。もしも無造作に扱い怒りを買えば大変なことになるだろう。私も今「お友達」がいないこの状況であれば抵抗すらできない……かもしれない。その存在が温和であることを願うだけだ。

とりあえずはあの箱を探するのが大前提。たづなさんや桐生院トレーナーには搜索してもらおうのがあるがたい。

『2月27日は私が旅立った日だ。これ以前は、もう見る必要はないだろう。』

タキオンさんの声に巻き戻しが停止される。

——手掛かり、無し。その状況に沈黙が続くかと思われたが、なんと口火を切ったのはタキオンさんであった。

『……トレーナー君は何らかの方法で私達の記憶を消去し、寮を脱出してどこかへ失踪

した……考えたくないが……ね。』

「——そんなこと！」

「そんなことって……」

重苦しく事実を事実のまま述べたタキオンさんの言葉に桐生院トレーナーが反論しようとするも続かない。もしも、自分が失踪した原因であつたならば——と桐生院トレーナーは自責の念を押されているのか目には涙が貯まっていた。

『元々、担当が怪我をして走れなくなつただけで業務に影響が出るような人だつたんだ。トレーナーとしては失格と言つても良いだろう。』

「タキオンさん……」

それは無いんじゃないかと言いたかつた。今まで“あの人”がどれだけ貴女を支えたのか、それを思えばそんな言葉は出る訳がない。

しかし、タキオンさんはさらに続けた。少しばかり呼吸が荒くなり、声が震えていながらも話を続ける。

『そんな……人だつたから……少しでも爪痕を残したくないから……彼の前からいなくなつたのに……これじゃ……！これじゃあ……！』

「タキオンさん……落ち着いてください」

『……………』

皆いっばいいいっばいだ。これ以上続けるのは不味いだろう。

「とりあえずです……いなくなつたとは限りません。」あの人”を探るのが先ではないでしょうか？」

話の方向性を変えて今やれることをやるしかない。そう、いなくなつたとは限らないのだ。たかだか5日程度見ていないだけで、どこかでヤケ酒でもなんでもしているのかもしれない。実家にでも帰っているのかもしれない。

そんな私の考えとは裏腹に、とある疑問が投げ込まれた。

「あの……先ほどから言っているアグネスタキオンのトレーナーなんですけど……B棟の202号室ですよね？」

「変な話なんですけど……本当に住んでました？」

傍観していた警備員さんから投げられた言葉は、事の重大さを私達に知らせるのには十分すぎた。

~~~~~

警備員さんから言われたその言葉に質問を何度か繰り返すと――

・202号室は空き部屋だったという記憶がある。

・映像を見るに確かに住んでいたみたいだが、顔はやはり見覚えがない。

・元競争バであるのでトレーナーがいないとデビューはできないことは知っているが、あの皇帝シンボルドルフに勝ったアグネスタキオンにトレーナーがいたのかすら疑問に思ってしまう。

ということらしい。

全くの意味不明であるが、私達も名前を言えないので共通点はある。要するにどの程度忘れているのかだ。

(これって……まるで存在が消えてしまったかのような……)

この考えを浮かべた途端ゾクリと嫌な予感がして背中を震わせる。”あの人”の記憶がゆっくりと溶ける様に消えていったというならもしかすれば……

そうだ。違和感もなく、最初からなかったように——一夜では駄目なのだ。有名な話だがコーヒーの銘柄には動物の体内で発酵させて作られるものもあるという。ゆっくりと、ゆっくりと胃の中でコーヒー豆が熟成するように記憶が溶けていき、そうして溶け切った時”あの人”の記憶が初めからなかったことになるのではないだろうか？

馬鹿げた話だがあり得くはない。タキオンさんはさておき、たづなさん、桐生院トレーナー、私……この三人に共通することは”あの人”と関わりが深かったことだろう。記憶では確か……他の人とあまり喋らないタイプに見えたと思う。というか、大体

光っていて話しかけられないという方が正しいだろうか。

(……スカーレットさん、シャカールさん……あとは……)

仮説が的中しないように願いながら私はまずはスカーレットさんの所へ向かうのだった。

~~~~~

(いた……)

スカーレットさんは少しぼーつとしているようで、声を掛けるとハッと驚いたようにこつちを向いた。とりあえず諸々の話を伝えてみると確かに覚えていたものの先程まで忘れかけていたらしい。

タキオンさんとかかなり親しかったスカーレットさんがこうなのだ。シャカールさんは忘れているのではないだろうかと考えながらもタキオンさんのトレーナーが居なくなっただけを伝える。

「え……いなくなっただって……それって大丈夫なんですか!？」

「全然大丈夫じゃないです。むしろ……」

”あの人が忘れられていくことを伝えるとスカーレットさんは信じられないといった表情であった。分かりやすく信じて貰えるようにそこにいたウマ娘にアグネス・タキオンを知っているか?と聞いてみる。答えはYesだった。

続けてトレーナーがいたか聞くと、とても悩んだ挙げ句よく分からないけど居たんじやないか。という曖昧な回答をしてくれた。スカーレットさんは啞然としていた。

「そんな……嘘ですよね……？冗談ですよね……？」

「……私はタキオンさんほど冗談は言いませんよ。」

そういえばタキオンさんは彼女に対してだけ何故か丁寧かつ礼儀正しかったか。なんて思いながらも、彼女は何とか納得できたみたいだった。

「何より今は、あの人」を知っている人を探しているんです。今の所考えて思い当たったのは貴女とシャカールさんだったんです。」

「……あ、シャカールさんならさつき会いましたよ。」

スカーレットさんはこっちですと誘導してくれる。階段を2フロア降りたところでシャカールさんは歩いてきた。どうやら何か苛立っているらしく、向かいから歩いてきた子たちは関わりたくないのか少し離れていた。

「シャカールさん。」

「あん？……ンだよ、お前か……って珍しい面子だな。」

「あ、あの……シャカールさんはタキオンさんのトレーナーさんのことを覚えてますよね……？」

「……」

顎に手を当て考える様子をしてみせた。長い沈黙の後、何かに気付いたのか大きく目を見開いてこちらを見ている。

「なア……オレはな……約束事とかそういうのは結構うるさいんだよ。進んで破ったこともねエ、どうしても仕方だねエ理由がなければやらなかったりしないって決めてんだ。」

「……知ってます。貴女は結構几帳面ですもの。」

「……ならよ……オレはよ、アイツ——タキオンのことは結構嫌いじゃねエ。普段研究だの実験だのなんだの喧しい奴が真面目に様子を見てやってってくれて言ってるんだ。ああいう風に頼まれたら断らねエよ……」

怒りの表情を浮かべながら話し続けるシャカールさんだが、今は一刻を争う事態になっっている。私だつて”あの子”がいなくなれば気付けなかった。誰が悪いのではなく私達全員に責任があるのだと思う。

「シャカールさん、残念ながら……」

——説明を受けてシャカールさんがどうなったのかは言うまでもない。

私が思い当たる節がある人物はこれで以上だ。他に誰か”あの人”を良く知っていた。そんな人物を知らないかと聞くと生徒会の会長と副会長はどうだと助言を受けた。そ

の理由は本来はタキオンの実験の尻拭いとして生徒会室に赴いていたからだ、スカールレットさんにそのまま伝えるのもなんだと思えば同じレースで走ったからだと言っておくことにした。

早速私達は生徒会室に向かうことにした。

~~~~~

コンコンコン

「今行く」

扉の中から顔を覗かせたのはナリタブライアンであった。少し眠そうな声で会長とエアグルーヴはいないぞと言うと要件はなんだと聞いてきた。私がその二人に用があるとと言うと、ついさつき理事長と秘書に連れられていったとだけ言い、後は自分で探してくれと言いついて扉を閉めようとした。閉める間にタキオンさんのトレーナーについて聞いてみると短く知らんただけ帰ってきた。

「……理事長室、でしようか？」

「まあそうだろ。」

再び移動を始める。

理事長室へと入るとシンボリドルフさん、エアグルーヴさん、たづなさん、秋川理

事長の他に桐生院トレーナーもいた。話はまだしていないらしく、今から諸々の話をす  
るらしい。理事長やたづなさんに断わって、私とその役を務めることにして貰うことが  
できた。

「それではまず最初に一つ質問をしても構いませんか？」

「ああ。構わない」

「問題ない。」

「では……アグネスタキオンのトレーナーを知っていますか？」

二者の反応、特にシンボルドルフさんの応答は今までにないものであった。

「ああ、○○トレーナーか。彼については知っているよ。」

「……今なんと？」

「彼のことは知っている。って——」

「いえ、その前……貴女、名前を言いませんでした……？」

「○○トレーナー……だろう？ エアグルーヴ。」

「……いえ、会長……その……なんと言っているのですか？」

シンボルドルフさんの言う——形容しがたい音？のようなものがなんと  
いのか分からないのだ。恐らくこの場にいる全員が何と言っているのか分かってい  
ないだろう。



「○○トレーナーと……こんな名前だったか。」

メモ帳に書かれた文字を全員が覗き込んだ——しかし分からない。文字であることは分かるのだが……

「会長さんよ……これ、何書いてンのか分かんねエぞ……？」

「……もしや、皆分らないのか……？」

コクリと頷いた。シンボリドルフさんは少し考えるように唇に手を当てた後、エアグルーヴさんにタキオンさんのトレーナーを知っているのかと聞いた。

「会長……私の記憶にはありません。更におかしな話ですが……タキオンにトレーナーがいなかったように思えるんです……」

バカな。と会長さんが言った。

（しかし、どうして会長さんだけ……？）

ある程度こういうものへの“耐性”は付いていると自負しているが、それでも諦めるしかないものもある。恐らくだが世界中で“あの人”の名前が出ることは二度とないであろう。しかし会長さんは例外であった。

兎に角、この異様な事態を終わらせる為に“箱”とあの存在について言うことに決めた。

「仮説になるのですが……良いでしょうか？」

「ああ……構わない。十分に異常な事態だということは分かったからね。」

ここにいる人はいずれも皆妙な面持ちでこちらを見ている。ふう、と一息吐いてからまずは私の体質について話すことにした。

「まず……胡散臭いかもしれませんが私は所謂霊媒体質というものなんです。視えてはいけないもの……端的に言えば幽霊などと言ったそういう”存在”が見れてしまうんです。」

思わぬ方向からのアプローチであったのかシャカルさんが声をあげる。その顔は彼女の嫌うロジカルな話ではなかった為か苛立っているように思える。

「……ンだア?ということはよオ……アイツのトレーナーは化かされたつてののか?」

そういえばシャカルさんは幽霊とかは苦手だったか。なんて思いながらも毅然とした態度でその通りですと返す。彼女も理解はできないが私がそういったものと接しているということを知っている為か気分が悪そうな顔をしたまま黙り込んだ。

「監視カメラにあった玄関の前に置かれていた”箱”——そして直前に映り込んだ霊的存在。映像を確認して頂ければ”箱”は誰にでも視えると思います。」

「……あの、霊的存在って一体どの辺のシーンで映っていたんですか……?」

桐生院さんの疑問によって私は確信を得ることができた。あの極めて高い格を持つた存在は私以外には見えていなかったのだろうかというところ——

「タキオンさんのトレーナーさんがドアから首を出して覗き込んだ寸前です。時刻は27日の午後4時43分だった筈です。」

「確かに何か小さい箱のようなものは拾ってましたが……それらが失踪と関係があるのでしょうか……」

たづなさんの疑問に一同が同調したように頷いた。私は更に説明を続ける。

「結論から言えば魅入られて神隠しにあつたのだと思います。映り込んだあれが置いたと思われる”箱”には何かの呪まじないが掛けられていた……つまり言えば、”箱”さえ見つけることができればあの人を見つけることができるかもしれません。」

知らない人には突飛な論かもしれない。だけどあの人を助けるにはこれしかない。直感で分かった。きっと、お友達も一緒にいるはずだ。

「兎も角、名前も姿も知らない人を探すというのは難しいでしょう。あの人顔写真でもあれば別ですが……タキオンさんが携帯で撮っているとは思えません。」

「ウチのトレーナーだったんなら顔写真の一つや二つくらいは残ってんだろ？今時は至る所に監視カメラが無数にあるんだから探せねえ事はねエだろ。映ってなくとも警察犬か何かで臭いでも辿れば良いハナシだ。」

私に続いてシャカルさんが現実的な解決策を示した。確かに顔写真は残っていない。うだし、臭いを辿るといっても考えも盲点であった。

「私はもう一度あの人の部屋を探してみます……もし、不自然な小箱を見つけたなら何もせずに私に連絡してください。」

もしも下手を打ってあの存在の琴線に触れてしまつては大変なので注意と共にチャットアプリのIDを伝えておいた。これでどうにかなるはず——いや、私しかできないのだ。必ずどうにかしてみせる。

決意と共に私は部屋へと向かうのだつた。

~~~~~

side タキオン

トレーナー君が失踪したというのは本当なのだろうか。

あの、お節介で進んで実験を受けるような奇人の彼が何も言わずに消えていくのだろうか？

(そんな筈はない……トレーナー君が、そんな。)

カフェの話によればトレーナー君が確認されたのは少なくとも6日以上は前が最後に確認された姿らしい。

(実家に帰つた、なんてことはないだろう。トレーナー君は生真面目だから休職届でも出すはずだから……)

いくら考えても見つかるはずはない。そう確信できるのは彼の眼を思い出したから

だ。あの濁った眼は夢しか追えない者のする眼だったからだ。少なくとも私がそうであつたように。

プルルルルル

「ん……カフェか。」

『タキ……ん……』

「ふむ、電波が悪いようだ。」

『タキオン……ごめ……さい……』

「……カフェ?」

僅かに聞こえる文字を繋ぎ合わせるとカフェが私に謝っているようだった。一体何があつたのかと聞く前に、カフェの声が今度は鮮明に聞こえた。

『失敗しました……本当にごめんなさい。』

(しっ……ぱい……?)

「カフェ、何が——」

『もう私では追えません……あの人は、貴女のトレーナーさんは残念ながら——』

——信じたくなかった可能性であった。

信じなければいけなかった。まるで、私の脚のように……脆く、先がない。

私が怪我をするのは実は分かり切っていたことだった。生来より私の脚は脆く今まで注意を払って生きていた。そして、自分の脚が長く持たないからこそ私は“最速”を目指した。例えば一瞬の生となるうとも“最速”として刻めれば良い。かくして研究者気質も持ち合わせていた私は憑りつかれたように実験を繰り返す日々だった。

そんなある日彼と出会った。

騙されやすく、不用心なトレーナーだと初めは思った。模擬レースの時に見たあの瞳を見て、そしてあの行動を見て、本当にバカなトレーナーだと思った。実験を嫌がる者はいても、理由もなく実験を進んで受ける者は見たことがなかったからだ。実験用マウスやモルモットであっても注射などは嫌がる素振りを見せるくらいだ。彼は生物的に反しているモルモット以下だと思った。

ある日彼を見直した。私の食事についてうるさく言ってきたので色々と答えると弁当を作ってくるらしかった。

……美味しかった。

弁当箱を返した時、てつきり次の分があるかと思っていると何もなかったのでちよっ

と嫌味を言ったが彼は何も言わずに弁当を作ってきてくれた。効率的であったので色々彼に投げることにしたが、彼は余程のことでない限りは応えてくれた。

「なあ、カフェ……」

『……なんでしようか。』

「前に、まだ引退しないと書いていたね。」

『……はい。まだ走りたいと思ってます。』

「……………そうか。」

——私に起こった怪我は私の脚の脆さに起因したものではない。

運が悪かったで済まされるような、本当に誰にでも起こりうる怪我だったのだ。

あの有馬。シンボリルドルフを打ち倒したあのレースは、私の考えを真逆に向かせた。序盤中盤のハイペースな展開でスタミナが無くなったまま先頭を走る私を直線で迫る皇帝を抜かせまいと動かしした脚は、私の限界を超えて動いていた。

2500を走り抜いた後、私の心の中の大部分を占めていたは“最速の証明”を果たせた達成感ではなく“勝てた喜び”だった。現在最強と名高い皇帝を打ち倒したのだ。最速のウマだと言ってもいい——だが、そんな思いは殆どなかった。

一体何故かと考える内に私はどうして勝てた喜びが勝つたのが理解わかった。

当然だが、私にも勝ちたいという気持ちはヒト並み……いや、ウマ並みにはある。し

かし、どちらかと言えば『勝ちたい』のではなく『追求したい』という側面が勝っていた。だが有馬で感じたのは“勝利への喜び”——どちらかと言えばそれは自分だけのモノではなくトレーナー君を含めてのモノであったのだ。

それが解った途端、なんだかレースへの情熱だとか、そういうものが消えかけていた。どうしようもない”やり切った感”に満ち満ちた私は復帰の道ではなく引退することを決意したのだった。

——あくまで自分に従った。そうだ、私は自分のやりたいことをしただけだ。走れなくとも速さの研究はできるのだ。本望であるはずなんだ。さつき電話で言ったことはあくまで本懐じゃないんだ。

だが、私の心はロックチーズのように穴だらけで、何とも言い難い思いしか浮かんでこない。

「……カフェ……電話を切るよ。」

『……………はい。』

スマホの通話終了ボタンを押すと、急に鼻の奥がツーンとした。

「……………トレーナー君……………ティッシュ……………」

胸の内にある想いがなんだったのか——一般的に見て両親からの愛を満足に受けていない私が気付くには遅過ぎたのだった。

世界線30315f3230

ノート半分ほどのページに渡る観察と考察の結果、ダイワスカーレットの加速について少しだけ紐解くことができた。

彼女の加速は“レースの終盤付近”で“先頭を走っている”と加速が始まる。逆にタキオンが先行すればあの爆発的な加速は起きないのだ。この発見はとても大きく、予めタキオンに先行させればあの苦戦がウソみたいに無くなっていた。

この事象について本人にも一応質問したものの特に何も思い当たらないらしい。手掛かりらしい手掛かりが見つからないのでこれをタキオンに生かすのは難しいと思う。タキオンは解き明かそうと色々やっているようだが……

(解き明かせないものを取り入れるのは難しいだろう……それに、変な癖でもついてしまつては大変だ。)

いつだって新しいものを使うことはリスクが付きまとう。俺はそういつた不穏分子が嫌いなことは恐らく理解してくれるだろう。石橋を叩いて割る——まあ割るのは本末転倒だがそれくらい慎重に慎重を重ねる方が安心できる。んまあ、わかりやすく言えば某RPGゲームの命中90%みたいなのは俺は信用できないといえればいいだろう

か。

「……もう、11月か……」

月日は早いもので、暮れがもうすぐそこまで近づいている。3月には大阪杯があるのだ。前哨戦として他のレースに出てみるのも良いかもしれないが……手の内をバラしてしまいかもしれないのが怖い所だ。以前にも言った通りシニア級は技量が高くあつという間に差することが難しい位置に追いやられるかもしれないのだ。追いやられてしまえば最後、京都ジュニアSのように強引に突破することもできず皐月賞のように負けてしまおうだろう。

当然それらを防ぐ手段は考えてある。そう、レース運びの知識を得ることだ。

当然俺一人で資料なんかを集めることができるとは思わない、なのでいくつかのアテにレースの知識なんかを手に入れてきた。……何というか、こういった立ち回りが得意になつた気がする。まあ、メディアへの露出であつたりとかGIで勝つたりしているトリーナーに教えを乞いに行くなんてことをしていると慣れてくるものなのかもしれない。

タキオンがやらかした時に上手く尻拭いもしなきゃいけないなあ……

……：……：……：そういえば、タキオンが大規模な実験をやつてるところを見てないな……：前に寮の全員を巻き込んだ実験をした時は申し訳程度だがお菓子を大量に作つて渡したんだつ

け……

懐かしい思い出に浸りながら事細かに追憶していく、確かニオイによるドーたらこーたらとか……最終的にフジキセキにバレて寮での実験の存在を言われてタキオンを叱つたんだっけか。

最近も実験の頻度はあまりないし、タキオンは一体どうしたのだろうか。いやまあ、実験ができない程ハードに鍛えているのは事実なんだが……それにしても回数だ。先月は6本くらいしか薬を飲んでないし、本当にどうしてしまったのか。

~~~~~

side タキオン

「長かった……これで……!」

つついっい声を上げて喜んでしまう。でもそれは仕方のないことだと私は言いたい。何故ならば心待ちにしていたものが手に入ったり、料理などを食べたり、私達であれば大きなレースに勝てたりした際には感嘆の言葉を漏らしても仕方がないだろう。

ん?そういう反応をしたことがないって?ならばフ○ム系ゲームをおススメするよ。(……何か、今変なことを考えていたような……まあいいか。)

この薬は摂取することで骨を強くする薬だ。カルシウムを摂るサプリメントなんかと同じだが、こちらはそれの数十倍以上の効能が現れるのだ。ドーピングではないのか

——という質問があるだろうが、これはドーピングではないとハッキリ言えるだろう。一般的なドーピングとして有名である『アナボリックステロイド』などもホルモンが作用することで筋肉量増大の効果がみられるものである。所謂筋肉増強剤はスプリンターや深い芝などを走るウマ娘が一步の踏み込みを強くしたい際に使うのだとか。逆にステイヤーは持久力を高めるために造血剤、古典的な方法では輸血のだが、それらを使う傾向にあるようだ。

ではこの薬がドーピングではないという点についてだが……これは骨を作る性ホルモンなどを活性化するようなものもなく、ただただカルシウムとビタミンDを補う薬なのだ。しかし効果は実証されており、とある伝手の実験結果ではほぼ98%の骨の強度が数十パーセントほど上昇したという結果も残っている。これほどまで期間を掛けたのは実験結果待ちであった為だ。

だが、そもそもウマ娘の“ドーピング”とはこの中央においてほんの一部を除いて行われているのではないのだ。これは地方のトレセンでも言えることだろうが、トレーナーとの密接な関係性を築いていることが多いからである。これはトレーナー君曰く感情というものにヒトよりも振り回されるらしく、ドーピングをする好ましい関係性を失う可能性がある為に自然と防がれるということらしい。まあ、確かにトレーナー君と契約解消という事態になれば私の身に不都合が生じるので十分な抑止力になることは分かる。次

に検査の存在だ。かなり精密な検査を実施し、ドーピングが判明した場合最低でも無期限出走停止処分が下される。走ることが目的で学園に來ているウマ娘にとつては実質退学処分<sup>に等しく</sup>厳しいといえ<sup>ば</sup>厳しいがURAのアンチ・ドーピング運動の一環という<sup>ことらしい</sup>。トレーナーにもアンチ・ドーピングの知識や啓発を積極的<sup>に取り組んで</sup>おり、想像の通りトレーナー君はかなり肩身の狭い<sup>思いをして</sup>いるようだ。

幸いにも私の実験は短期的な強化を主眼に置いたものではない。そもそも能力を伸ばす<sup>ことにおいて</sup>は彼が考案するトレーニングをこなす方が効率が<sup>良いので</sup>自然とそういう<sup>方面の実験は</sup>少ない。まあ、何故か彼は<sup>身体に</sup>効果が出ない<sup>実験なのに</sup>身体が光り<sup>だすのだが</sup>……あれについてはよく<sup>わから</sup>ない。

……長話が過ぎたねえ。

兎も角、これで私の怪我の“可能性”は断たれる<sup>ということになる</sup>。今まではセーブ<sup>していた</sup>トレーニングもオーバーワーク<sup>を超えて</sup>も怪我をする<sup>可能性は</sup>万が一、いや億<sup>が一にも</sup>ないのだ！

「これで共に高みへ……速さの可能性を見よう！」

試験管にある液体を嚙下し、私は満足感と<sup>えもいわれぬ</sup>幸福感に<sup>包まれる</sup>。効果が完成<sup>されるのは</sup>1月……シニア級<sup>になった</sup>あたりだ。大阪杯には十分に間に<sup>合う</sup>だろう。

出典：競馬法 | JRA 20頁  
a b o u t / l a w / p d f / 0 1 . h t t p s : / / j r a . j p / c o m p a n y /  
p d f

## 世界線30315f3231

「やあやあやあトレーナー君！突然だが早速実験をするよ！」

「はあ……」

いつもの通り突然始まる実験には何も言うことは無いのだが、トレーナー室というのに何故か私服姿の登場であった。いや、どうして学園内なのに制服を着ていないのかというツツコミの前にタキオンから待ったが掛かる。

「君は今どうして私が制服を着ていないのかという疑問を感じているだろうか……これも実験に必要なのだよ。」

人差し指と親指を伸ばしてこちらを指し示す仕草を見せた。こちらへと歩いてきながら貴重な説明が始まる。

「まず一つ。そもそもこれは衣類による感情の変化のテストなんだが……まあ、資料によれば普段と違う雰囲気になると所謂“ギャップ萌え”という事象が発生するらしい。そこで普段制服と体操服と学園指定の水着しかないが、こういった服装をすることで君にどんな反応を得られるのかという所だ。」

さあさあ何か思うことは？としきりに聞いてくるタキオンであったが――



「……何か目的と実験が合つてなくないか？」

「そんな訳無いだろう。ほら、トレーナー君？何でも良いから言いたまえ。」

「……似合つてるな……とかでいいか？」

「ふむ……あの薬はどこだったか……」

「……とても似合つてる。雑誌デビュも夢じゃないと思うぞ。」

「そうかい！そうかい！ただ私は雑誌には特段興味はないが……よし、これを付けたまえ。」

戯れはこの程度といった風に謎にメカメカしいヘッドギアを渡される。それを頭につけると、ヘッドギアから伸びているコードが繋がっている機械をタキオンが確認している。

「これは脳波を計測して感情や思考を読み取る装置さ。……とは言つても精度はよくないがね。精々が喜怒哀楽とその度合いを表す程度だ。」

「はあ……」

「ふうん……君、疑つてるね？試しにちよつと怒つたりしてみてくれよ。」

「いやそんなにホイホイ怒れつて……」

「別に形だけでもいいさ。」

（怒れ……怒れつて……？こうか……？）

「ん、こらら〜!!」

「……やはり計測機器に異常はないか。上辺ではなく心から思う感情じゃないと駄目みたいだねえ。」

「ええ……」

「ま、大丈夫さ。君が思わず泣いてしまったり笑ってしまったりするようなものを持ってきた。」

「DVD……?」

「そうさ! スカーレット君から借りてきたものでその効果は抜群——らしい。」

そう言いながらテレビとDVDプレイヤーを引っ張り出した。言われるがままにソファアへと座らされ、何故か横にタキオンも座る。

「こんな横に座らなくてもいいんじゃないか?」

「このコードが短すぎるのが問題だね……ほら、ここまでしか伸ばせないのだよ。」

「……そうか。」

タキオンが適当に一枚選ぶとDVDプレイヤーにディスクを入れる。ディスプレイに映ったのは『春のウララ』という題であった。これが中々泣けるものでトレーナーとウマ娘が離れ離れになるも奇跡的な再開を果たすラストは涙を堪えることはできなかつた。

「ふうん……どうだったかな？」

「久々にガチ泣きだよ……これで実験は終わり？」

「いや、まだだ。もう少しデータが欲しい。」

「……でも、もう5時だしなあ……」

まだ昼過ぎだと思えばもう夕暮れである。いやはや時とは早いとは言うが……

「はあ……君はどうしてそう……」

「何が？」

「~~どう~~してそう勤勉なんだ？ 最近ちよつと恐怖を覚えるよ。」

「」

タキオンが俺を心配しているだと……？

(どういう……ことだ……ツツツ!?)

「一昨日からの君の行動を言ってくれ。」

「一昨日……? うーん」

「まず朝起きてここに来てレースの資料を纏めて……えーと、確か一段落したから夜ご

飯を食べたっけ? それからもう一回——」

「そこだよ! そこ! 何普通に泊まろうとしてるんだい!？」

「いや……レースまであと3ヶ月だし……急がなきゃって」

「まあ、百歩譲ってレースが近いから良いだろう。……その後は？」

「……タキオンの昼ご飯作る為に家に帰って作ったあとに戻ってきてまたまとめる作業を始めたんだっけ。ええとそれで……ああそうだ、タキオンの昼ご飯を作る為に帰ったんだ。」

「あのねえ、トレーナー君。確かにレースで勝つことも大事だ。私も勝ちたいという気持ちくらいはある。だけどねえ、限度つてもものがあるだろう。なんだい？君は家に帰って私の弁当を作ったあととすぐにもう一回弁当を作るといふ不可解な行動の疑問を持たないのかい？」

「……いやまあ、なんか朝早いなあ……とは……」

「……はあ……君のそれは大したものだが限度というものがある。それに今日は何日だいい？」

「……1月4日だ。」

「そう。昨日一昨日は三が日だがトレーナーは原則休日らしい。なのにこれはどういうことかな？」

「……俺たちトレーナーには残業を躊躇ってはならない時がある……」

「ああそうそう。確か三が日が原則休日になった理由は何だったかな——？」

タキオンが俺の労働を咎めたいのは分かったが、一体どうして咎めるのか。今まで関

心関心!とか言って推奨するかのような振る舞いだと思っていたのだが……俺は気になつてタキオンに聞いてみることにした。

「なあタキオン。どうして止めようとするんだ?」

「……………ふむ。」

「俺が今していることはタキオンにとって利だ。今までは止めこそはせずむしろ勧めると思っていた。」

的確な質問にタキオンは更に頬に手を当てる仕草を見せた。

「確かに君が働く事は私にとって利になる。速さの追求にとってはね……」

所詮私も一個人であり一般的な感性を持ち合わせているのだよ——とタキオンは続けた。

「……………そうか。」

(……………なんだか、変わったな。)

以前よりも他人と接する機会が多かつたからなのか、思いやりの気持ちでも芽生えたのだろうか。

「……………分かつた。別にこれらは今日しなくてもいい仕事だ。また明日にでも回せば良いだろう。」

「それが良い。」

「明日の分の弁当も作らなくとも——」

「……それは、困るねえ……」

心底困った様子のタキオンを見て今日は休もうと考えるのだった。

## 世界線30315f3232

『女帝』……エアグルーヴ——18歳、現在は専属契約。素行は真面目で生徒会業務などもそつなくこなすが自分にも他人にも厳しいウマ娘……その素行や高い実力、物怖じしない性格などから同じ生徒からモテるが本人は会長のシヤレに気付けないことを深刻に思っている一面もある……らしい。」

「一体何だい。」

「いや、敵を知り己を知れば百選危うからずって言葉があるだろ？ならば色々な情報と思つてな。」

「……ふざけてないでレースについて教えてくれないかな？」

「わかった、悪かったよ……」

冗談もほどほどにエアグルーヴについての情報を軽く話していき、大阪杯のコースの特徴を説明する。

「注意すべきは序盤の上り坂だろう。僅か1ハロンから登り始める坂は初動の逃げを潰されやすい。かと言ってここにスタミナを割くのも2000m——ましてやあのエアグルーヴを相手取って逃げ切るのは難しい。」

相手はシニアでも指折りの実力を持つエアグルーヴだ。天皇賞秋を勝ったとはいえまだまだレース運びはシニアのウマ娘に劣っている。一度捉えられたら最後、バ群に埋められることになるだろう。

(……単純にあの末脚だけでも強敵なのに……)

サイレンススズカほどの逃げならばエアグルーヴから逃げ切れる。だがタキオンの逃げはあくまでも門外漢——や、門外女と言えればいいのか？まあいい。

問題は本来適正外である作戦を取らせていることにある。ただでさえ相手は最高クラスのウマ娘なのだ、本来の動きとして馴染んでいないのであれば狙われる。

「坂さえ乗り切れば安牌な逃げ……先行も出走メンバーを見る限りは問題がなさそうだが？」

「出走メンバーを見るに先行が3人で逃げは無し。……正直どちらが良いのか俺にはわからない。高度な柔軟性を持って——といえは聞こえはいいが……とにかく実践でしかわからない。」

エアグルーヴとは相対したことは無いので彼女がどれほどなのかというの噂やレースの映像を見るしかない。元々肌で感じたものでないとしっくりこないタイプの俺は映像学習というのあまり好みではないのだ。

ペーパーテストと実技で実技が得意という人がいるだろう。それと同じ。



「調整の為にレースは出るのかい？」

「いや、出ないことにしてる。」

---

---

---

---

「……クソっ！」

つい先日のことを思い出した。あの時の俺は呑気なもので憶測だけで塗り固められた泥船に乗って勝つ気でいたのだ。

『——アグネスタキオンの先頭はここまで！』

エアグルーヴは強敵であった。いち早くタキオンのスタミナ温存に気付き、いち早く仕掛けてきたのだ。

このレースの面子でエアグルーヴの末脚を越えるウマ娘はいなかった。タキオンですら五分だったのだから。

差しを選んだエアグルーヴが前に上がったことで、女帝より前のウマ娘は差を縮めさせまいとペースを上げてしまう。よもやここで上がってくることを想定してなかった

タキオンもリードを守るべくペースを上げてしまい、かなりのハイペースで中盤を走ってしまおう。

(潰された……っ！全く動きがないタキオンだけが有利だったあの状況を……っ！)

後ろが見えていない者は前へ前へとどンドン走り、タキオンも押し出されるように行行ってしまった。

エアグルーヴが前に出たのは勝負に出たのではない。そのことを今の位置が物語っている。バ群は縦長どころか前方が固まりキノコ状のようになってしまい、ペースを守る為に下がったタキオンは見事にバ群に埋もれてしまっている。エアグルーヴは……外から抜き去ろうとしているようだ。

(見てわかる……能力的にはタキオンが勝っている筈なのだ。だが技術が圧倒的に負けている……)

『先頭が最終コーナーへと差し掛かった！大混戦のこの状況、このコーナーで誰が前につけるか!』

タキオンは行けない。前のウマ娘が壁となり、左右も満足に動けない。少なくともこのコーナーを抜けるまでは……

そして前のウマ娘……あの3人は体力が持たないだろう。ゆっくりとゆっくりとだが速度が落ちている。徐々に後ろに押し出されている。——そしてエアグルーヴと

先頭集団のリードは無くなった。

「……………これほどとは！」

思わず口から出た言葉は感嘆の一言

たった一手で潰される。そんな……………そんなことって……

(足りなかった……………対策が……………)

一体俺は……………どうすればタキオンを勝たせてやれるんだ……………？

『エアグルーヴ！ 凄い末脚で集団を抜いて行った——！』

~~~~~

「……………」

「……………」

「……………とりあえず晩御飯だ。どこかで食べて帰るか？」

「うん……………そうするよ。」

阪神競バ場から電車を乗り継いで川を超え、なんば駅から北へ行くと道頓堀川に辿り着く。

道行く人の喧噪が耳に入っては流れていく。勿論彼らの話題は大阪杯だ。エアグルーヴが強かっただとか、アグネスタキオンは勝てると思ったとか。

「……………」

しまった。この大通りを選ぶべきではなかった——タキオンの反応を見てそう思うのに1秒すらかからなかった。何故ならタキオンの顔がそう物語っていたからだ。

「次がある。必ずしもそういう訳では無いけど……勝てるように鍛えればいい。」

「……ああ。」

URAFアインナルズに出る為にはもう少し戦績が必要だ。

タキオンの脚に負担が掛からない距離のレースは宝塚記念、秋の天皇賞の2つ。

必ず勝たせる。俺にはその知識がある。

(……一先ずは宝塚記念を目指そう。2ヶ月間のスケジュールは決まっているが……本当にそれで良かったのか考え直す所からだ。)

俺は決意を改め今後のことを思案するのだった。

世界線30315f3232

4月——日

以前の私より^{最高速度}スピードが落ちた。

記録上のタイムは向上しているもののラップタイム——特に上がりの3ハロンが低下していることが分かった。

食事はトレーナー君に任せているが各栄養素の配分は素晴らしいと言えるほど、体重は増加したが殆ど筋肉であり体脂肪率は数%を記録している。肉体的には良いコンディションと言えるだろう。

まだ致命的という程ではない。しかし、これから先タイムが落ちていくのが続いているのであれば早急に対応していかなければならないだろう。

4月——日

今日は計測機器を使い筋肉量や身体情報を計測した。走法についても細かく見てみ

ることにした。ウマ娘の走法とは様々なものだが、私が取るのは大多数の一般的なウマ娘と同じものであるという認識であり、トレーナー君も同じだった。

目に見える変化や機械による計測を行ったが筋肉量や心肺機能には変わりはない。しかしタイムだけが低下し続けている現状を変えるために早急に対処策を講じる必要がある。

4月——日

スパート時のラップタイムの低下が止まった。

どんな要因で解消されたのかは分からないが、兎に角負のスパイラルから抜け出せたので良しとしたいが……どうしてもタイムが伸びない。このことをスカーレット君に相談してみたものの、何か変化を与えてくれるようなものは簡単に見つかることは無かった。

もう少しで宝塚記念だが、なんと出走権を獲得ことができたらしい。トレーナー君は出走するかは私の意向に沿うと言っていたが、以前のような末脚のキレを取り戻すことが出来なければ凡走することになるだろう。

6月——日

ある実験をしていたところ、私は一つの可能性に辿り着いてしまった。そしてその原因となるモノも発見した。どうやら私は自身に投与したあの薬が、私にとって最も残酷な運命を齎すものであったのだ。

私が求めた効能は身体の丈夫さを向上させる薬であったのだが、意図しない——観測もしていない副作用があった。

体の丈夫さ……私の理論で言えばこの薬の中に存在するあるバクテリアが脳の信号によつて働きを高めることで結果的に自然治癒力を格段に上げ、多少の怪我などを即座に治すというものであったのだが、実際のところ少し作用が異なっていたのだ。確かに自然治癒力は上昇するのだが、問題はこのバクテリアにあった。

なんとこのバクテリアは身体情報を記憶していたのだ。その記憶に基づいて修復を促してしまう——残念なことに自身の身体的な成長すらも元に戻してしまうのだ。

例えば筋肉が増えるのは酷使され、そこを修復することで強くなるが、このバクテリアは酷使された筋肉を即座に元通りにしてしまふ。

つまるところ、私の筋肉や骨はこれ以上成長することはないということだ。これが子供——胚の成長などに作用づるのはわからないが……私の見解では産まれる子供にもバクテリアが存在するようになる筈だ。現状マウスによる生物実験を行っているが、生殖したマウスが子を産まないことを鑑みるに私の予想は正しいだろう。

医学的観点から見ればこの研究は興味深いものだ。人体の修復からイヌネコなどの不妊治療など非常に幅広いものに応用できると思う。しかし……これらが成長期以前の対象に使用される場合、非常に大変なものとなる。考えたくはないが生体兵器としての運用も考えられるだろう。

このことをトレーナー君に伝えるかは未定だ。

世界線30315f3233

タキオンの能力は一定の水準を保つようになった。それは平均以上の能力はあるが、突出したものは無いというようなものである。あの末脚のキレは無いこともないが……現状、どうにも次へのステップアップを出来ない状態にあるようだ。

一般的に、こういった伸び悩むという状態をプラトリーと言うことがある。練習による効果が認められない……ちやうど今のような状態のことを指すのだ。

これらの状況を改善する為に練習による効果を実感させる目的で導入したのがスコアボードだ。以前も説明した通りそれぞれの距離の記録を測り、どれほどの成長があるのかを見せることでモチベーションを高める為のものである。

モチベーションが高い状態で練習をさせるとより多くの効果を得ることができるといふのは通説だが、俺はこれにはまだ先があると思っっているのだ。それを証明する取っ掛かりになるのが良きライバルの存在であると睨んでいる。

過去の名バ達……思い出させるのは白熱したレースだ。殆ど同じような実力でどちらが勝つのかわからない。こういった状況はウマ娘にとってプラスの働きをするのだ。今一緒に練習をしているダイワスカーレットなんかが良い例だろう。彼女のライバル

と言えるウオツカとはかなり近い実力差ではあるが、同世代ではそこそこ抜きん出た実力を持った二人だ。

何故抜きん出た実力を持っているのか？そう考えると導けるものは彼女らの関係にある筈だ。二人は友達、それもかなり親しい仲である。その為お互いの実力を把握しているのだ。長々と言っているが、つまるところ目標がしつかりと見えている状態なのだ。

相手を越したい。あんな実力で、次はもつと強くなってくる……そういう感情があり、それを打ち倒したいと思うのなら最高のモチベーション維持だと思えないだろうか？

確かに、アグネスタキオンは敵は無かった。彼女自身の持っているモノと効率的なトレーニングによって他に追従を許さない圧倒的な能力を持っていた……

しかし負けてしまったのは俺が勝ちたいという気持ちを作れなかったからではないか？いや、ただ勝ちたいという漠然な気持ちじゃない。”誰か”に勝ちたいという明確な感情を抱かすことができなかったからタキオンはこうして伸び悩むことになったのだろう。

いずれにせよ伸び悩むという状況はタキオンにとって悪影響しかないと分かってきている。どうにかしてこれを脱出しなければ……

能力が伸びぬのならば頭を使うようにさせれば良い。幸いにもタキオンにとって作戦はまだまだ改良の余地がある分野である。レース中にしっかりと考えられるようになるにはある程度場数を踏むしかないが———どうにかしてレースをせざるも判断力を付ける方法を模索しなくては……

そうして俺は———いや、俺たちはたつぷりと土を味わった。

時間が無かった———相手が強かった———なんとも言えるが……全ては俺の責任と言えるだろう。間違はなくタキオンの能力は全体でもかなりの上位に位置している筈なのだから。

正直、今のタキオンのコンディションは最悪だ。一応トレーニングには真面目に取り組んでくれているがどうにもこの状況を悩んでいる———というより諦めているような言動が端々から感じ取れてしまう。さながら「絶不調」といったところだろう。

どうすれば……調子を取り戻せる？ どうすれば……

~~~~~

side タキオン

「大変なことになってしまった……」

私は現在一生分の悩みが同時に襲い掛かってきているのだろうかと思っている。かのバクテリアの件もそうだが、先日宝塚記念で負けてしまったことなども当てはまる。

しかし、ついさつきそれらを越す悩みの種が産み落とされてしまったのだ。

まず、バクテリアについては研究の進展は少しだけあった。どうして宿主の身体の成長を阻害するのかということについては、食事の際に出される脳の信号に同調してバクテリアの活性化が見られた。実際、マウスを使った実験では餌を多く食べた個体と少なく食べた個体で体内にあるバクテリアの数が大幅に違っていた。だが……ここからが悩みの種の正体である。

私は餌の実験でもう一つのケースを作った。それは餌を全く食べない状態のマウスはどうなるのかということを試してみた。通常、マウスは2〜3日餌を食べない状態が続くと餓死してしまうのだがなんとそのマウスは5日も生き延びた。

だが——ああ……思い出したくもない。

あのマウスはただ死んだだけではない。ガリガリに痩せ細り、脂肪がほとんどなく内臓もほとんど失われていた死体を調べてみると餌を多く与えた個体群のおよそ数十倍のバクテリアが検出されたのだ。

飼育に使用したゲージ、その他諸々の関連した物品を調べるといくつものバクテリアが見つかると。私の白衣の裾からもバクテリアが見つかった。

その後細心の注意を払って実験を続けてみた結果、バクテリアが宿主から十分な栄養を供給されない状態が続くとあらゆる細胞をスポンジのように食べ尽くしてしまうということがわかった。

宿主を食べ尽くし、増殖したバクテリアは血液だけに留まらず、体液や排泄物にも含まれるようになる。幸いにもバクテリアは2日ほどで死滅するが……バクテリアは継続的に栄養を供給されなくなった時点で大量に増えるため餓死するまでの数日間はあるところ撒いてしまう。

いや、現代日本では餓死することなど殆ど無いのだから死ぬ危険性は無いに等しいのでこの心配は無用だ。だがむしろ……体液に含まれるということが問題なのだ。

今まで私はどれくらい公共の施設を使った？

飲食店だと数え切れない。もちろん購買だってそうだ。もしか、彼から貰っている弁当にだって付着している可能性は拭いきれない。

これについて何よりも優先して調べなければならぬ。私は他人に実験を施すが、あくまで良識の範囲内に収めるつもりだからだ。日々の実験も精々身体が光る程度のものに抑えている——筈だった。

(兎に角、まずは比較的接触の多いトレーナー君。カフェ、スカーレット君も……デジタル君もだな……)

感染症検査とでも言えばどうとでもなる。兎に角彼女らにバクテリアが移っているかを確認しなければならぬ。

私はいくつかの検査キットと私からの感染を防ぐための手袋やマスクを持っていくのだった。

## 世界線30315f3234

俺は今学園のターフを眺めている。

タキオンと色々話し合った結果、今はクールダウンが必要だと感じたと言っていた。なにやら色々実験したいらしいが……かくいう俺も現状を変える為の一手を考えなければならぬ。

(知見を広めるにはまず他のウマ娘を観察しなければ……)

ターフはいつもたくさんのウマ娘がいる。練習、練習、練習……揺らめく空気はもはやただの熱気ではない。気持ちや思いの残滓が見えているのかもしれない。

どんなウマ娘もここで走ってきた。ここで夢を追い掛けた。

夢とはなんだ——？

(目的なのか。目標なのか。幻想なのか。……はあ……)

目に映るのはありきたりなフォーム、ありきたりな速度、ありきたりな——

「……わからない。」

どうして勝てない？何が足りない？

ここで練習する全てのウマ娘に劣っているとは思えない。  
何が駄目なのだ。

俺は……酷い話だが少しだけあの時計のことを考えた。

超常の現象を使っても——ああクソ……駄目だ。あれはどうしようもない時  
だけだ。

宝塚記念だつて2着だった。一着ばかり持て囃されるが2着でも相当な榮譽だろう。  
冠は取れなかったかもしれない。しかしそれでも榮譽は受けた。少ないかもしれな  
いが名声は上がったのである。それじゃあ駄目なのか？

だが……心のどこかでタキオンが最も強いウマ娘だつて証明させたいと思っている。  
あれはこんなところで埋もれるモノではない。怪我に、立場に、どんなことであれ走  
らないのは損失なのだ。

3年間でいいのだ。ウマ娘のピークである3年——そこで最速の証明をすればい  
い。そしてそれを果たせるポテンシャルがある。

「……もう一度すべてを洗い流そう。合宿が始まれば授業の時間を練習に回せる。」

ダイヤモンドは掘り出された時から58面や114面にカットしたものが出てくる



訳ではない。

秋の天皇賞までに残された最後の練習時間……合宿。そこでどこまで強くなれるかが鍵になるだろう。

俺は新しい発見のためにターフを眺め続けるのだった。

~~~~~

side タキオン

「ふう……一先ずはこれで大丈夫か……」

比較的接触の多い人物への検査が終わった。カフェは難儀したが見えない”お友達”が関与したのかバクテリアが死滅していた。スカレット君も問題なく、弁当箱や箸からの感染が懸念していたトレーナー君も異物混入や細菌の類への対策が凄まじくなんとかなっていた。同室のデジタル君は彼女が使っている机やベットにはバクテリアが発見されることがなかった。念を入れて本人を検査しても見つからなかったので大丈夫だろう。

寮の浴槽は私はほとんどシャワー室のみで済ませるためそこからの感染は考えられない。食事もほぼ三食彼に作ってもらっている為に食堂での感染は無い。

「……………ふむ……………」

幸いにも学園内での感染は確認されなかった。しかし学園外ではどうだ？例えば飲

料やゴミ捨てしたものをカラスのような雑食性の動物が漁ればバクテリアが広がるだろう。

しかし人間のよう毎日食べる生活をするようには思えない。多少の飢えが続けばバクテリアが活性化し死に至るはずだからだ。

(野生動物の大量死なんてニュースが流れれば……)

人だってそうだ。なんらかの事情で感染すれば……少なくとも考えれる範囲の影響は空腹になりやすい、怪我がすぐに治る、排泄物が少なくなる、不妊になってしまう……こういった症状が多く出れば拡がった目安になる。

(一先ずはなんとかなるだろうが。)

ワクチンでも開発すべきか……なんて考えながら一息つく。しばらく奔走していた為か自分でも気付かないほどに疲れていたようだ。

「……そういえば合宿か。」

蝉が鳴き、喧しい夏の環境音と外のウマ娘の練習の声、室外機の駆動音などが聴こえる。あと一週間と迫る合宿までに荷造りをしていなくてはならない。

そういえば、と思い出した。トレーナー君から予定表が送られてきていない。いつもは一週間前には合宿全日程が組まれて渡されるはずなのだが……

(少し悩んでるみたいだったが……)

私が勝てないというのは仕方がない。薬を飲んで怪我の心配をなくしたとはいえ、私はさながら翅が歪んだ蝶々のような状態だ。肉体が完成されていない、あと少し——具体的に数ヶ月飲むのが遅ければというほどであったが私の身体は未完成なのだ。

(速さについては未練があるがプランBだつてある。そうだ、彼のノウハウがあればスカーレット君にアドバイスをして……——)

レースのように思考が移り変わっていく。いずれも走っているのは私ではなく、別の誰かだ。

私の可能性は閉じたのだ。仕方がない。私の未来は潰えたのだ。

だが……

どうしてか、数々の思考の中一つだけ私が走っている光景が浮かんでいた。叶わぬ夢には未練が残るのだろうか、私はなんてことのない感想を考えながらも別の『速さ』を追求する方法を探そうとするのだった。

世界線30315f3235

波の音——そして痛いほどに刺してくる太陽光線。

合宿施設に俺とタキオンはやってきていた。俺の目の前にはジャージを着たタキオンが座っていた。

「さて、合宿が始まったが何をするか分かるか？」

「……わからないな。君から渡される予定表も無かったじゃないか。」

「今回予定表を渡さなかったのは作らなかったからだ。……いや、作れなかったという方が厳密に言えば正しい。」

「ふうん……ではトレーナー君、一体どんなことをするのかい？」

「具体的に言えば走行フォームの変更だ。」

俺の言葉にタキオンは少し意外そうにした。そして自分のフォームは研究を重ねて辿り着いたものだと言った。

対して俺は主観と第三者の観測は違う。フォームだって成長した身体に合っているのか？と疑問を呈する。タキオンは納得がいかないといった反応だったが、フォームの再確認はする気になったみたいだ。

「じゃあまず走ってみてくれ。現状どんな走りだったのか再確認したい。」

少しストレッチをしたタキオンはウォーミングアップと言わんばかりの速度で走る。俺はそれを注意深く観察しながら見守る。

ある程度走ったところでタキオンにストップをかけた。

「良い走りだと思う。」

「……そうかい。」

「だがまあ、タキオン。どうしてお前を砂浜で走らせたと思う？」

「そりゃあ砂浜でのトレーニングが許可されているからだろう。あと、砂浜はターフやアスファルトに比べて負荷が大きいから筋力を付けやすいからだ。」

「まあ……そういう観点もあるかもしれないな。だが外れだ。」

「外れ?……トレーナー君、そろそろトレーニングの目的を話してくれ。何をしているのか不可解で堪らないからね。」

タキオンが少し不機嫌になっていた。

「……悪かった。流して走っていたからつい意地悪しただけだ。本当は砂浜に出来た足跡が目的だ。」

「足跡」

「ああそうだ。ここ数週間の研究の結果で足跡が重要だと分かったんだ。足跡を見れば

課題がすぐにわかる。」

「……足跡でどうするんだい？正直さほど重要なものではないと思うが……」

「じゃあタキオン。走るといふことはどうやって行われている？」

「……地面を蹴って前へと。」

「その通り、走るには地面を蹴る。いくらフォームを見たって、真似したって完全に真似は出来ない。身体の大きさから始まり筋肉量や関節の可動域、柔らかさなどが違うからな。……だが、もう一つ大事な要素を忘れてる。それは地面の足跡だ。今まで俺は80%程度の情報だけで推察していたのだ。」

「随分と大袈裟に言うじゃないか。何か根拠があるのか？」

「初めは俺も疑いかけた。着目したはいいが意味のないことでは？とな……だが、仮説は十分に説として成り立った。人の足跡は所詮ほぼ何も残らないが、ウマ娘の力は人の凡そ2から10倍と言われている。だから十分な情報が残り得るんだ。」

「ふむ……確かに言われてみれば十分に理に適っているように聞こえてくる。中々面白い着眼点じゃないか。」

「ありがとう。それでだ。少なく見積もっても約20%の情報はこういうものかと言うと……この地面に対して掘られた穴だ。これが厄介でな……まず、主に2つの走法が取られているから取るデータがかなり多くなった。だが2つの走法……まあほぼ全てと

言っても構わないが、全てに同じ事が言えた。足が遅いと言われるウマ娘はこの穴が浅いか、深すぎるのかのどっちかだ。」

「それで、私の足跡はどういうものだったんだい?」

「……若干だが、深い……気がする。いや、すまない。砂の足跡のパターンは調べていなかった。」

マジかお前っていうような顔をされたが仕方がないだろう。コースに砂はないのだ。

……ダートはあるが砂浜とは似ても似つかない。

「確かに失念していた。……だが、ここにもターフはあるから大した問題じゃない。」

「はあ……君は基本的に優秀だけど、たまにどうしても頭のネジが外れるどころかネジというものが無くなるのはどうにかならないかな……」

「準備不足だったのは認めるが何もそこまで……」

なんて言いながら浜の近くにあるターフへと向かう。そこには多くのウマ娘の姿があった。恐らくあの娘たちは夏合宿中にレースが多くあるスプリンターやマイラーなのだろう。

「ここには足跡のサンプルが大量にあるな……やりやすい。」

「今の発言、随分と変人、いや変態の発言にしか聞こえないから気を付けたまえ。」

失礼な。俺は変な実験なんてしないし、所謂グヘヘ……みたいな性根の腐った層じゃ

あない。タキオンのためにただ痕跡を調べるだけだ。

「……とりあえずもう一回走ってくれ。そうだな……コースと平行にあの4ハロン棒くらいまで走って、帰りは少し外に広がって全力で来てくれると助かる。」

「なるほど、分かったよ。」

タキオンはジャージを脱ぎ、半袖の体操服となる。ウマ娘の体操服は風の抵抗を受けにくい特殊素材が使われているものが多く、GⅡ以下では体操服の着用が認められている。そもそもGⅠでのレースでは勝負服を着なければいけない規定があり、GⅡ以下は著しくレースを妨げるものでなければよいとされている。また、ライブ用の汎用勝負服でもレースには出て良いのだが、勝負服といえばGⅠってほどに染み付いた価値観があるらしいが、GⅡ以下で行う引退レースの際に勝負服を……というウマ娘も多かつたらしい。

ちなみに汎用ですらレース用、ライブ用の洗い替え2着が基本であり、トレセン学園の特別料金とはいえ10数万する。個人の勝負服は指定の衣装を作る専用の店があり、そこでのオーダーメイドの為とんでもないほどのお金がいる。これもまた2着必要だし、一括で買えばそこそこの社会人の稼ぎの2〜3ヶ月分の金が消えていくらしい。クリーニングだって大変だ。まあトレセン学園内に理事長が作らせた無料のクリーニング施設もあるのだが……

こんな到底払えないような金を彼女たちはどのように捻出しているのかと言われれば、まず汎用勝負服までは入学と一緒にお金を払わなければならぬ。特待生を勝ち取ればかなり軽減されるらしいが一般的には大学並みの入学金が必要だという。俺個人としては中高一貫で寮かつハイレベルな施設を使えるのであれば安いくらいだと思う。まあ施設に関しては理事長がテコ入れしているからであって、先代のときは今ほど充実はしていなかったらしい。裏話として……

……まあなんだ。かなり脱線したが簡単に言えば体操服は走りやすいってことだな。さて、そろそろタキオンが帰ってくる頃だ。

(フォームが正解かなんてのは正解はない。一見空気の抵抗を受けにくい格好が大切だが、しっかりと身体を立てて胸を張って走った方が速いと言われているから……)

まあ、あくまで誤差だ。背をピンと立てると体軸を意識しやすくなるが、所詮それまでだ。それどころか乗用車と同じレベルの速度で走るウマ娘は前傾姿勢でも風の影響を受けにくいために推奨されることもある。

「よう。」

「ふう……さて……どうだいトレーナー君。」

俺は足跡を観察していく。タキオンは地面を眺めている俺に着いてきている。一先ずは折返し地点で止まった。

「そういえばまだしていない話があった。どうせなら説明しながら話そう。まず、足跡が付くには歩かなければいけないってのは当然だろう。」

ポケットからペンを出して指し棒の代わりにする。タキオンの足跡には、ここで走っているどのウマ娘にも表れている特徴がある。

「ここだ。この話のキモはここにある。」

つーつと足跡の特徴的な溝をペンでなぞった。

「蹄鉄……ふむ、」

「ウマ娘の靴には何故蹄鉄がついているのか？という所から話は始まる。まあ、つまるところあれはスパイクの役割を果たしている訳だ。蹄鉄を装着した状態でのアスファルトの走行は禁止されている場所が多いのはアスファルトのキズやヘコみによる転倒防止の目的だが、それは蹄鉄の有無によって大きく速度が変わるということを意味している。」

ペンでグリグリと蹄鉄の跡を押し込みながら話を続ける。

「蹄鉄の有無で速度が変わるのか？今までの話は全て俺が思った疑問、そして事実だ。ここからが本題になる。さてタキオン、ここまでの足跡を見てどう思った？」

「……徐々に深くなっている。だが、ここは減速したから、浅い。」

「ああ。踏み込みを深くする必要がない。言い換えれば、前に進む必要がない」つてことだ。走るからこそ足跡が付く。逆に、足跡が付かないということは走っていない。ここまででは大丈夫か？」

「……なるほどね。それなりに形にはなっている。だがまだ結論を聞いていない。そこから私の走りをどう変えるんだ？」

「じゃあ、タキオン。もう一回質問するぞ？一番効率よく前に進むにはどうすればいい？」

「……風の抵抗を受けずに走る……とかかい？」

「あく……悪い。質問が悪かった。これはベクトル的に考えてくれればいい。一番強く力が伝わるのはどうする？」

「そりゃあ、直線に……——ッ！」

ハツとした顔を一瞬、そしてその後は少し不安を覗かせるような顔だ。

「そう。走ることを例にして言うならば地面と平行になるように何かの壁を蹴れば良い。スタートなら壁を垂直に蹴れば最速で走れるだろう？」

俺は手で壁から垂直に線を伸ばすような仕草をした。

「随分と——巫山戯たことを言うね。」

「理解はできる。レース中に壁はない。あつたとしても後ろのウマ娘だろう。だが、限りなく平行に近いものは蹴れる。」

「蹄鉄が刺さった地面……ということか?」

「その通りだ。ウマ娘の勝負服——その踵のデザインに遊びが多い理由は殆どのウマ娘が蹄鉄のみで走行しているからだ。つまり、この時点で地面に掛かる力は蹄鉄のみに集約されていると言っても過言ではない。もう理解しただろ?地面と平行に力を入れるほどに……しかしすぐに引き抜けるように走っているウマ娘は速いのだ。綱引きで左右交互に引つ張り力を合成してまっすぐ引つ張るのと同じように、目的地に対してまっすぐ力を掛けるのが出来るのはここだけなのだ。このアプローチを正しいものにするばタイムが上がるの十分に見込める。」

俺とタキオンは少し移動して目的地へと向かう。目的地とはそれは——……

「足跡のパターンからしてここまでのタキオンの走りは悪くない。特段変える必要も無いだろう。……だが、ここからだ。」

そもそもレースでは駆け引きがあり、走法に思考を割くリスクとリターンが釣り合っていないので殆どのウマ娘には俺の理論は必要がないという結論だ。

だが……タキオンならあるいは……という期待を込めて、俺はこの理論を説明する。この理論を実用まで持っていくのは駆け引きが唯一存在しない場所——そう、『逃げ』

だ。それも同じ逃げと重ならない大逃げの類だ。

宝塚記念で負けた時は最後の200mで追い抜かれた。そこまでは誰にも近寄せることなくリードを完全に守っていたのだ。もし、中盤途中に最適な走法で走れていれば勝っていた可能性は高い。

「……浅い、な。」

蹄鉄の跡は殆ど無いと言っても差し支えない。ほぼほぼ踏み込みが出来ていない証だ。だが、一体なぜ……

タキオンのフォームは走っているところを見ただけでは改善点が見つからない。それほど完成されているということだ。

(……もしや、脚部の脆さを考えてこの踏み込みになっているのかもしれない。前の世界だつてタキオンは走りを意図的にセーブしていたと話していた。だからこそ今回は栄養を取らせ、筋肉を付け、丈夫な脚に仕上げたんだ。)

「……………タキオン。」

「なんだい？ 問題点が見つかったかい。」

「いいや……………一つ、質問をしていいか？」

「……………」

「お前は……………満足に走っているか？ いや、自身の限界まで走れているのか？」

「……………そうだねえ。この足跡が私の最大限の力ではないことは十分に理解していると思うが……………確かに踏み込みが浅いと言われればそうだといえる。」

「覚えがあるみたいだな……………?」

「……………何、問題ないさ。」

「異常があればすぐに言え。怪我をすれば元も子もない。」

俺はタキオンに聞いた。帰ってきたのは問題ないという言葉だ。

「問題ないというのは必要がないってことだ。怪我の心配はない。そう言える。」

「……………なら良い。兎に角——」

それから改善点を挙げていく。この日から俺とタキオンは本格的な矯正訓練が始まったのだった。

世界線30315f3236

GI未勝利のアグネスタキオンが秋の天皇賞を制した。

誰も追いつかせない逃げ……まさに超光速と相応しい逃げだと言われた。

そんな思い出深い栄冠を手にしたのは一年前の出来事であった。

「アグネスタキオンか……どうする？」

「うーん……予想は外すかなあ……」

アグネスタキオンは期待されていなかった。

確かに強い。強いのだが——どうしても「おいしい」ところで負けているからだ。

直近のレースである宝塚記念も2着ということも受けてアグネスタキオンが大真面目に勝つと思う人はそう多くなかった。

だが、ここに一人。いや二人——アグネスタキオンが勝つと考えている者たちがいる。

一人はアグネスタキオン、もう一人はそのトレーナーだ。

秘策か、それとも一度勝った地だからの過信か。その確かな自信を目にしたウマ娘やトレーナーたちは当然警戒した。トレーナー目線でも、そして何度かレースを共にしたウマ娘はその身をもって知っているのだ。アグネスタキオンは格上……少なくとも凡才ではないと。

その筈、タキオンを後から追い越したことのあるウマ娘は片手で数えられるほどのだ。大半が固いブロックに囲まれた状態であるために本領を発揮出来ない状態が多い。2着だったとはいえ宝塚では背中が小さいままレースが終わった。つまるところ、背中を捕らえたことは一度もない。

だが……アグネスタキオンが勝つとは思っていない。少なくともGⅠ出走ウマ娘なのだ。この日勝つために最良の努力を積んできた。

各々が自分の勝利を疑わない中、ゲートインの号令が下された。

（天晴な秋晴れだ。バ場はとても良い……雨で不良や稍重であればあの作戦が無駄になっていた。）

タキオンの歩法を変えるのは困難を極めた。結局のところ天候に恵まれなかったこともあり、それは良バ場でしか使えない限定的なものになってしまったが今日のバ場は問題ないだろう。

「いける……勝てるぞ……」

『各ウマ娘——スタートしました!』

今日ここに、秋の盾を得る戦いの火蓋が切り落とされた。

『アグネスタキオン前に躍り出た! 続いて3番——』

横一線のウマ娘達の誰よりも前に出たのはタキオンだった。

(……3番は今年の春の天皇賞で逃げていた娘だ。だが、復調出来ていないようだな……)

春の天皇賞に出たのは4人の内の一人——タキオンの逃げにも追い付くポテンシャルはある娘だが……春の天皇賞からあまり調子が良くないみたいであった。幸運なことだ。

完璧に近い状況だ。タキオンが前、追走するも競り合いを仕掛けない逃げだけ……まだまだ序盤だがこれ以上ない好機だ。

『アグネスタキオン——彼女は掛かっているのでしょうか?』

『少々ペースが速い気もしますね。後続をバテさせる作戦かもしれません。』

速い——そうだ。タキオンは速い。

あの走法がそうさせているのだ。実際問題今のタキオンの速度は序盤とは言えないほどだった。

(掛かっていると見え……ツツツ！)

最高効率で進んでいるだけなのだ。当然ただスピードを出すだけよりスタミナの消費は驚くほど少ない。こうしている間にもあつと言う間に4バ身差だ。

『後ろを突き放して5バ身のアグネスタキオン。今だペースを落としません……これは……』

『掛かっていたのではないのでしょうか……？ですがこのままスタミナが持つか心配です。去年の盾を授かったウマ娘ですからペース配分を間違えることは少ないと思いますが……』

「……いける。いけるぞ……！」

タキオンは最後のコーナーをそのままの速度で目指している。じつくりと差す後続集団が慌て始めているのが伝わった。だが最早射程圏内ではない。あの皇帝ほどの切れ味の差しを持ってしているウマ娘はここにはいない。後ろが一気に上がってきて、速度を上げてタキオンを追おうとした3番を追い抜いていく。

『後続が一気に動いた！まだ最終コーナー前ですが一人旅のアグネスタキオンに迫っていく！』

『アグネスタキオンもスピードを上げて前へ……もしやスタミナを付けてきたのかもしれませんね。まだまだリードと余力を残しているように見えます。』

『アグネスタキオン最終コーナーに入った！後続との距離が近づいてくるがアグネスタキオン逃げ切れるか!？』

『非常に綺麗なコーナーでの走りですね。減速どころかどんどん加速しているようにも見えます。』

『続いて4番もコーナーに入った！コーナーとは思えない加速で先頭との距離2バ身——アグネスタキオンの影を踏んだ！』

『コーナーを抜けて最終直線！4番はアグネスタキオンの影を踏んだままだ！』

『美しいコーナーワークでしたが、このまま直線に進むことアグネスタキオンにブロツクされてしまう形になっていますね……』

『位置取りが有利なアグネスタキオンか!？それともこの坂で後続が追い抜いてしまうのか!？いや、追い抜かない！アグネスタキオンが更に加速している!』

『あれ程のハイペースで坂で加速できる余力があるとは……』

呆然とした解説が歓声と悲鳴に割って入る。

(砂浜での練習が活きている……坂での走行の調整が素晴らしい。)

あれがもし、最後尾にて坂を上ったならば、踏みしめられた馬場にうまく力を加えられずあそこまでの加速できなかったであろう。

先頭であるからこそアキオンは輝けた。そのポテンシャルを持っていたのだ。

——そして、俺は偶然にもそれを引き出すことができた。正直に言えば、逃げを取ることすら最初は想定外だったが……こうして結果を出している。こうして今、彼女は誰よりも早くゴールしている。

盤石にして万端。偶然ながらも本人ですら知りえなかったタキオンの強さを引き出したと言えるだろう。

然として前を走っている。

『アグネスタキオンが独走！アグネスタキオンが独走！只今4バ身差、突き放した！』
理論値は出せないかもしれない。

だが——お前は速い。最速の証明には十分だ。

『アグネスタキオンゴールイン——！』

一年前とは訳が違う——走法が知られても尚、勝利は盤石の如し。

~~~~~

side タキオン

掲示板に表示されたタイムを見て呟いた。

「ハハ——上出来だ。」

いつものように漏れ出してしまふ笑いとは違い、口を開けて笑ってしまう。

かつて、彼と会ったとき。

効率を極めた練習法に――

バランスは勿論、心身を充実させる食事――

最高のパフォーマンスを出せるモチベーション管理に――

万が一が起きた際のプランニングに――

私は思わず舌を巻いた。

客観的に見てみた場合、これ程までにウマ娘を育てることが得意なトレーナーがいるのか!と驚愕したものだ。

客観視は大切だ。私はその性格上客観視というものをしがちだ。まあ、あくまで主観こそが第一だが。

そして私は一時期低迷した。それは――彼の知識や技術が不足した訳ではない。私のごく個人的な感情のせいである。

勿論、個人の感情というのは他人が推し量れるものではない。彼を責めるつもりはさらさない。

感情とは不思議なものだ。

もう、変わることはない肉体だと思っていた。

あの時――彼と勝ちたい。そう想った時には私が見ていた壁はとつくのとうに消えていた。

計算も、法則も、予想も全て些細なことだと気付いた。

走り終わって鼓動が落ち着いた筈の今でも——強く、確かに、身体中に脈動している。

この想いがある限り終わらない。終われない——

——私の物語は二篇あつたのだ。

速さを求めるそんな章はもう終わった。

これから始まる新しい物語は私でさえどうなるのかわからない白紙のページばかりだが、それでも確信持つて希望に満ち溢れているものだと思つている。